

海をめぐり、橋をわたり、呉をかたる

# KURE Adventure Guidebook 10

の物語



歴史文化を楽しむ

## 呉アドベンチャーガイドブック

## はじめに

呉。昔から造船で慣れ親しまれたこの  
 まちは、近現代の歴史から「海軍」のま  
 ちとして語られることも多い。しかし、  
 その歴史を丁寧に紐解いていくと、それ  
 らの言葉だけに押し込めることのできな  
 い、多様な文化の層が折り重なっている  
 ことに気づかされる。

発掘されたナウマンゾウの化石は、はる  
 か太古の時代、この地に確かに命が息づい  
 ていたことを教えてくれる。港町に残る  
 風待ちの灯籠は、潮と風を読みながら船  
 出を待った人々の記憶を今に伝える。岩  
 場で使われてきたカワハギの猟具には、海  
 とともに生きてきた暮らしの知恵が刻ま  
 れている。そして、今日の前に架かる大  
 きな橋は、人やまちのあり方そのものを  
 変え、新しい景色と日常を生み出した。

ものが語り、場所が語り、そして呉に

今生きる人たちが自身の生活と混ざりあ  
 った「文化との物語」を語り直していく。  
 文化のまわりには、その営みを受け継いで  
 きた誰かの「語り」が必ずある。「語り」  
 こそが、文化を面白く編み直し、誰かが  
 そこへ足を踏み入れるきっかけとなり、未  
 来への橋渡しを担うものではないだろ  
 うか。

この冊子では、呉に生きる10人の語り  
 部とともに、古代から現代へと連なる歴  
 史や文化の断片に触れていく。仕事や暮  
 らし、まちとの関わりの延長線上で語ら  
 れるそれぞれの言葉は、過去と現在をゆ  
 るやかにつなぎ、あなたを別の時間へと連  
 れ出してくれるはずだ。

呉というまちを旅するための、そして  
 文化と出会い直すための「だれかの扉」  
 になることを願って。



# 10人の語り

05 | 海を持つ玄関としての役割  
07 | 呉アドベンチャーマップ

## 09 | 船をめぐるアドベンチャー



**STORY 01**  
蒲原みのりさん  
11 | 舟は漕がねど唄が好き  
16 | 音戸の舟唄を歌ってみよう



**STORY 02**  
斉藤孝穂さん  
17 | 航路が作った奇跡のまち  
24 | そして女たちは花を飾る



**STORY 03**  
初田志織さん  
25 | 大きな遺産と、祖父母の小話

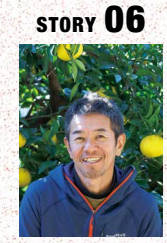


**STORY 04**  
河崎圭一郎さん  
31 | 同じまちで同じ時代を生きること



**STORY 05**  
坂本篤紀さん  
35 | 船を造る無数の手  
39 | 船を造る人、今昔

## 41 | 橋をめぐるアドベンチャー



**STORY 06**  
高島俊思さん  
43 | 橋がくれた景色と喜び  
47 | 意外と知らない橋のこと



**STORY 07**  
松浦宣洋さん、松浦南子さん  
49 | 土器が架けた古代への橋



**STORY 08**  
中野仁貴さん  
55 | おいしい牡蠣が食べたくて  
61 | 人間と鳥の連携プレー「アビ漁」



**STORY 09**  
久米ゆきさん  
63 | 今年もヤブがやってくるヤア！ヤア！ヤア！



**STORY 10**  
天本雅也さん  
69 | 未来の文化は今、足元に  
74 | 今を生きる文化活動

77 | おわりに

どうして呉ってこんなに多様？

# 海が持つ 玄関としての役割

古くから瀬戸内海の重要な航路であった呉は、国内外を問わず人や物が集まる場所だった。潮待ち・風待ちの港として栄えた御手洗や、航海安全を願って供えたとされる和同開珎の枝銭が見つかった亀ヶ首など、海を通じて文化や人の営みが呉にもたらされてきた。そうして伝わった祭りや行事、信仰は、土地の暮らしと結びつきながら根つき、地域ごとに異なる文化として今も受け継がれている。

# まちなみ

港や船着き場を拠点に、呉市のまちは大きくなってきた。海を通して多様な人・物・技術・文化が入り出す中で、地域ごとに異なるまちが作られている。時代ごとに役割を変えながら受け継がれてきたまちのかたちは、今も人々の暮らしの中に息づいている。

## 平安時代



**音戸**  
平清盛が切り拓いたと伝わる、音戸の瀬戸。その荒波がもたらした繁栄が、江戸時代から続く風情あるまちなみの礎となった。

## 江戸時代



**三之瀬**  
広島藩によって重要な港として指定され、朝鮮通信使が計11回寄港した地。当時の船着き場「長雁木（福島雁木）」は、姿を変えながらも今に残る。



**御手洗**  
潮待ち・風待ちの港として栄えたまち。江戸時代に隆盛を誇った茶屋や豪商の家屋など、今に残るまちなみが当時の様子を色濃く伝えている。

## 明治時代



**呉市内**  
明治期に4町村の合併により呉市が誕生し市制が施行された。呉鎮守府の開庁に伴い人口が急増。軍港整備とともに近代都市のまちなみがつくられた。

# 祭り

呉には海と山からの恵みに祈りを捧げる「祭りごと」が多く残る。文化の往来が盛んな場所でもあったからこそ、地域の外から持ち込まれて定着したものも少なくない。担い手たちが生きた文化として、今も大切にその姿を伝えている。

## Q.1

1年間で呉港に入港する船の数はどれくらい？

A. 約**23,500**隻

呉港には年間約23,500隻の船舶が入港する。これは1日あたり約65隻、ほぼ1時間に2~3隻の船が港に入っているということ。そのうちの17,392隻が小型船、6,078隻が大型船。大小さ

まざまな船が絶えず行き交う呉港は、今も人や物、そして文化を迎え入れ、外へ送り出す役割を担っている。

## 海上安全の祈り



柏島神社例大祭

海の安全と豊漁を祈願するお祭り。大漁旗を掲げた約100隻の船が御座船を囲み海を巡る。「瀬戸内三大管絃祭」の一つ。

## ヤブ



貴船（龍王）神社例大祭

「神の警護役」とされる木彫りの鬼面を被った「ヤブ」がまちを練り歩く。呉市の約30ほどの神社のお祭りに現れる。

## 盆踊り



第8地区ふれあい祭り

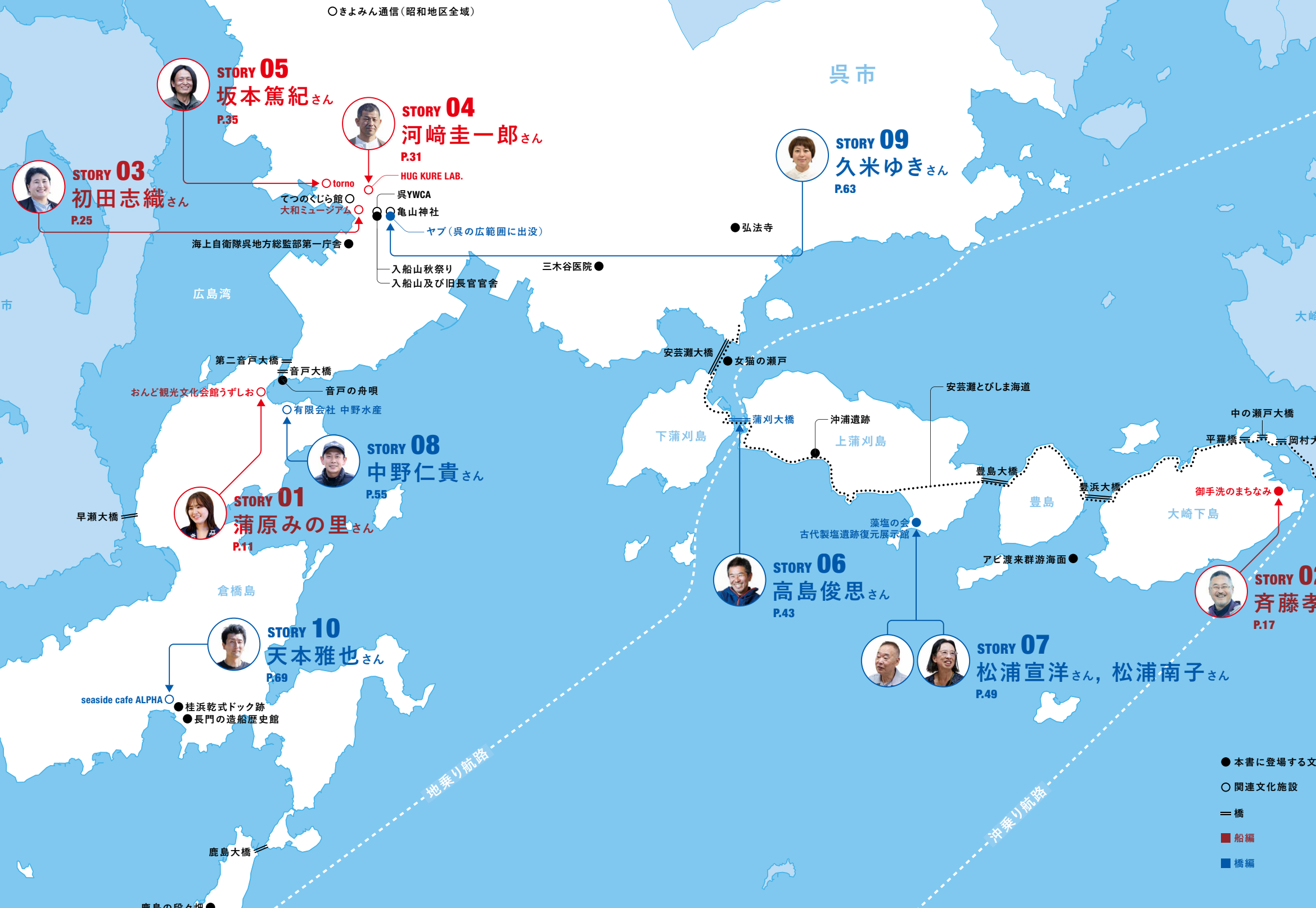
呉市内各地で行われる年中行事。伝統的な「呉音頭」の他、アレンジされた「呉よっしゃこい音頭」が踊りに現れる。

## 神楽



小坪神楽

石炭を運ぶ海路を通じて愛媛県大山祇神社の神楽が流入したことが始まり。江戸時代から200年以上続いている。



**STORY 05**  
坂本篤紀さん  
P.35

**STORY 04**  
河崎圭一郎さん  
P.31

**STORY 09**  
久米ゆきさん  
P.63

**STORY 03**  
初田志織さん  
P.25

**STORY 08**  
中野仁貴さん  
P.55

**STORY 01**  
蒲原みの里さん  
P.11

**STORY 06**  
高島俊思さん  
P.43

**STORY 02**  
齊藤孝穂さん  
P.17

**STORY 10**  
天本雅也さん  
P.69

**STORY 07**  
松浦宣洋さん, 松浦南子さん  
P.49

# 船をめぐる アドベンチャー

船が主役だった時代、海はたくさんもの  
のがやってくるまちの玄関だった。運ばれ  
てくるものは、物資だけではない。航路  
に位置づけられた港町には人が集まり、  
商業や交通の要衝として栄え、潮待ち  
風待ちの時間がその土地独自の文化を育  
んだ。呉には船がもたらした文化の足跡  
が、今もそれぞれのまちに色濃く残る。  
船が、海が、このまちに運んだものとは  
一体なんだったのか。今、呉に生き  
る文化の担い手たちの語りに、そのヒント  
があった。



# 舟は漕がねど

# 唄が好き

音戸がくれた、  
舟唄と情景

平清盛が切り拓いた伝説が残る海峡、音戸の瀬戸。潮の流れが速く、古くから船乗り泣かせの難所として有名だ。その海の上で、船頭たちは息を合わせるために歌う——それが「音戸の舟唄」だ。船を漕ぐ音も、船頭の姿も、今は目にすることはできないが、地域の人々によって歌い継がれている。現在、呉市の無形文化財に指定されているほか、日本三大舟唄の一つにも数えられ、かつて確かにそこにあった情景を今に伝え続けている。大学進学を機に、呉から東京に住まいを移してもなお「舟唄を歌い続けたい」と語る、蒲原みの里さん。その情熱の支えには、歌うことそのものへの愛と、「小さな頃から一緒に過ごしてきた」舟唄が伝える、故郷の景観があった。



語り部：蒲原みの里

2005年生まれ、広島県呉市出身。小学生の頃に民謡を歌い始め、8歳のときに「2014 ひろしまフラワーフェスティバル」民謡名人戦で優勝。2023年には「第14回 音戸の舟唄 全国大会」一般の部で最優秀賞を受賞するなど、受賞歴多数。現在は明治大学に通いながら、呉市の無形文化財である「音戸の舟唄」を全国へ発信している。

#### 関連する文化財ストーリー

- ④ 海に祈る多彩な信仰と地域に根付いた暮らし

## 波のリズムに身体を重ねて

「ヤーレー船頭かわいや」の歌詞で始まる、音戸の舟唄。芯の強さと前へ進むような伸びやかさを併せ持つその唄は、一度聞いたら忘れられない。かつての船乗りたちの威勢の良さを想起させつつ、その独特の節まわしの中に、瀬戸内海をたぐったう潮の流れを感じさせる。

柔らかく朗らかな表情が印象的な、蒲原みのりさん。実際に舟唄を聞かせていただくと、話しているときの雰囲気とは打って変わった力強い歌声に、彼女が20歳であることをつい忘れてしまいうことになる。手漕ぎの船も船頭もほとんど見なくなった時代に生きる彼女は、どのように自身の想像力を唄に乗せているのだろうか。



**KAMBARA** 始めたての頃は「なんなんだろう、この唄」って感じでした。言葉の意味も分からなくて、本当に音をただ追うだけ。けど、年を重ねて、船頭さんの存在や「この唄で船を漕いでたんだ」ということを知っていった。「おんど観光文化会館うずしお」にある実寸大の船を手にとってみたら「こんなに重たいもので船を漕いでいたのか」と驚きました。大変さを想像することしかできないんですけど、実際に道具に触れて想いを唄に乗せられるようにしています。

音戸の舟唄にはさまざまな歌詞があるが、1番を歌った後は、歌い手が好きな歌詞を選んで歌うのが慣例だ。唄の途中には「ハードッコイドッコイ」といった合いの手も挟まれ、船頭たちの頼もしい背中がありありと浮かんでくる。



**KAMBARA** 安直ですけど、「安芸の宮島」の唄が広島っぽくて好きで、よく歌っています。弟は「渦潮ドーントぶち当たるヨ」という唄を好んでよく歌ってましたね。

音戸に生まれた人たちは、この舟唄を聞きながら、思い思いの故郷の景色を脳内で結んでいるのだろうか。尺八や擬音（ぎおん／艦が軋む音を表現する楽器）の音も相まって、ツンと冷たい風が吹く音戸の瀬戸の情景を聞き手に想像させる。



音戸の瀬戸には「音戸大橋」と「第二音戸大橋」の2本の橋が架かっている。地元の人々のあいだでは、それぞれに思い入れがあり、蒲原さんは「第一（音戸大橋）のほうが好き」だそう。好きな橋を語り合えることも、この土地ならではのエピソードだ。

## 音戸は、私に舟唄をくれた場所

音戸の人にとって、舟唄とはどんな存在なのだろうか。蒲原さんによると「誰もが知っている」というわけではなく、触れる機会がない人も少なくないという。

彼女が舟唄と出会ったのは、小学1年生の頃。祖母の勧めで歌い始め、習い事のような感覚だったと当時を振り返る。幼い頃から歌が好きだった蒲原さんは、現在明治大学でアカペラサークルに所属しており、歌うことが生きる上で密接なことであると伺える。

歌うことが好きな人ならばしばしば「十八番」を持っているが、蒲原さんにとって、十八番と舟唄はまた違う位置付けにあるようだ。



**KAMBARA** 音戸の舟唄は小学1年生の頃から一緒に過ごしてきた唄なので、他の唄とはやっぱり思い入れが違いますね。でも十八番とも違うんです。これだけ長くやっていますが、年を重ねる度に音戸の舟唄の魅力に気づくことがあります。大学の友人に舟唄を聞かせたら「すごいね」と言ってくれて、初めてこの唄を聞く人の反応から魅力を知ることがありました。

それを聞きながら、現在蒲原さんは故郷を離れて東京で暮らしていることを再認識する。それでも、イベントや大会、稽古に合わせて音戸に時々帰ってきているという。生まれ育った土地を初めて離れた今、音戸という場所をどんなふうに見ているのだろうか。



**KAMBARA** 東京に出て、地元でいつも目にしていた船や海を見る機会がなくなって、あの風景は当たり前ではなかったんだと、離れたから気づきました。少し前まで、音戸には日本一短い渡船があったんですけど、そういった昔から残るものに触れる機会も最近はありません。今もこうして歌える舟唄を私にくれた場所です。宝物だったんだなって思います。だから、自分を育ててくれたこの景色もなくなつて欲しくないなって思います。

# 音戸は、私に舟唄をくれた場所。

8歳のときに、現在も師事している舟唄の師匠に出会った蒲原さん。「そのときを境に『私は民謡に取り組んでいるんだ』という意識に変わりました」と、当時を振り返る。

## 日本三大舟唄の一つ、音戸の舟唄って？

一説では、江戸時代中期から後期にかけて瀬戸内海地域に広がり、以降船頭や漁師を中心に歌い継がれてきた、今なお呉市の無形文化財として愛される「しごとうた」。「淀川三十石船舟唄」「最上川舟唄」と並ぶ、日本三大舟唄の一つ。平清盛が切り拓いた伝説が残る、呉市本土と倉橋島の海峡「音戸の瀬戸」が発祥の地。古くから瀬戸内海は海上交通の要衝で、特に潮の流れが激しいこの地の船頭たちには、高い操船技術が必要だった。長時間の過酷な仕事を乗り切るために生まれた唄だ。

1番の後には、好きな唄を続けて

# 音戸の舟唄を歌ってみよう

1番)

ヤーレー船頭かわいや、  
音戸の瀬戸でヨー  
一丈五尺のヤーレノー、  
艫がしわるヨー

ヤーレー安芸の宮島、  
回れば七里ヨー  
浦は七浦ヤーレノー、  
七恵比寿ヨー

蒲原さんが好きなのは  
「安芸の宮島」の唄

## 「音戸の舟唄」の リズムの秘密

「音戸の舟唄」は、急流を漕ぐ船乗りたちのしごとうた。テンポが早く切るようなリズムかと思いきや、ゆったりたつぷりと歌いあげるのが特徴だ。同じ舟唄でも、歌うシチュエーションごとに違いがある。「音戸の舟唄」は漁に出るときに歌われた唄なので、大漁への期待を込めて遅めのテンポで歌われた。一方、漁の後に陸地へ戻るときに歌われる唄は「早く市場に下ろしたい」気持ちで船を飛ばすため、唄のリズムも早い。

合いの手は、  
ハードッコイドッコイ!

ここで歌える！

呉市内の2つの場所で講座が開かれている。節回しをまとめ、今の「音戸の舟唄」をつくった高山訓昌氏が立ち上げた「音戸の舟唄保存会」が主催となっている。



### 1. おんど観光文化会館うずしお



音戸大橋をすぐ横に眺めながら歌える場所。館内の「音戸の舟唄」の歴史展示スペースで船乗りの道具に触れたり、高山訓昌氏の歌声を聞いたることができる。

〒737-1203  
広島県呉市音戸町鰯浜1-2-3

### 2. 呉市つばき会館 6階



「音戸の舟唄」を歌うなら、呉市つばき会館へ。「音戸の舟唄」の入門講座を受けることが可能。

〒737-0051  
広島県呉市中央6-2-9

## Q.2

音戸渡船の1日の乗客数は？(戦後)

A. 6,000人~7,000人

渡船の1日の乗客数は約7,000人ほど。音戸大橋が1961年に開通するまで、島の人たちにとってはなくてはならない足だった。4隻の船、10人の船頭で幅の狭く急な潮流の海峡を1日平均250

往復。お客さんが棧橋に立つのが仕事の合図。時刻表はなく、24時間運航で、1人でもお客さんが来れば船を走らせた。幅90mの日本一短いと言われる航路は、木造船で片道3分。

2021年10月に  
その歴史に幕を閉じた

当たり前のように歩いてきた道を久しぶりに訪れると「ああ、帰ってきたな」と思うことがある。そんなふうに、蒲原さんは舟唄を歌うことで、音戸の情景を呼び起こしているようにも想像された。

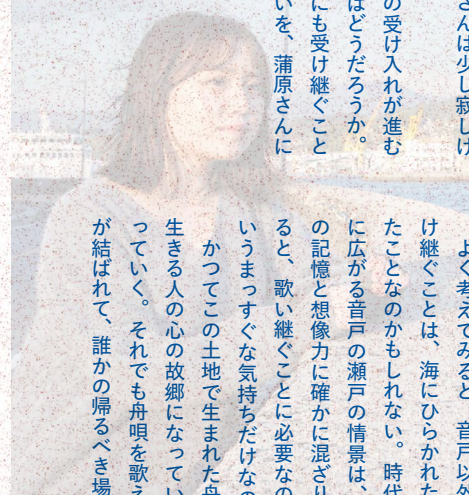
民謡は、庶民の生活の中で自然発生的に生まれ、口伝えに歌い継がれるもの。だからこそ、唄そのものに音戸の生活が宿る。蒲原さんにとっての舟唄は、音戸と自身をつなぎ続けているものであり、「持ち運べる故郷」でもあるのだろうか。

### この唄がなくなってほしくないから

多くの民謡がそうであるように、音戸の舟唄も継承の壁に直面している。その保存と発信に取り組むのが、蒲原さんが所属する「音戸の舟唄保存会」だ。近隣の小学校での出張授業のほか、地域で催されるイベントでの披露など、さまざまな形で舟唄を残すために活動する。

一方で、呉市で開かれていた「音戸の舟唄全国大会」が2023年をもって終了するなど「舟唄を聞ける機会は減っているかも」と、蒲原さんは少し寂しげに話す。

近年、地域産業では外国人労働者の受け入れが進むが、音戸の舟唄のような文化の場合はどうだろうか。土地に根ざした唄は、外から来た人にも受け継ぐことができるのだろうか。答えのない問いを、蒲原さんに投げかけてみた。



蒲原さんの言葉を受け止めながら、外から来た人が音戸の舟唄を歌う光景を想像してみる。そのとき、彼らは歌いながらどんな情景を結ぶのだろうか。

よく考えてみると、音戸以外の人がこの地の唄を受け継ぐことは、海にひらかれた呉では昔から起きていたことなのかもしれない。時代を経て変わらぬ眼前に広がる音戸の瀬戸の情景は、舟唄を歌わんとする人の記憶と想像力に確かに混ざり合っていく。そう捉えると、歌い継ぐことに必要なのは「私も歌いたい」というまっすぐな気持ちだけなのかもしれない。

かつてこの土地で生まれた舟唄は、時を経て、今を生きる人の心の故郷になっている。日々、風景は変わっていく。それでも舟唄を歌えば、何度でもその情景が結ばれて、誰かの帰るべき場所になっていくはずだ。

どんな人であれ、舟唄のことを知って歌ってくれる人がいたら、それが継承なんじゃないかなと私は思います。音戸の人しか歌えない唄は広まっていけないし、そうしたら唄そのものがなくなっちゃう。小学生の頃に参加した国民文化祭のことがすごく印象に残ってるんですが、ここでは舟唄を歌うだけじゃなくて、船の模型を使ったり、清盛さんの衣装を着て歌ったりしたんです。そうすると、聴覚だけでなく視覚でも舟唄を楽しんでもらえる。その時代に合った伝え方がきつと必要で、「伝わっていくってこういうことなのかな」とそのとき強く感じました。



どんな人であれ、舟唄のことを知って歌ってくれる人がいたら、それが継承なんじゃないかなと私は思います。音戸の人しか歌えない唄は広まっていけないし、そうしたら唄そのものがなくなっちゃう。小学生の頃に参加した国民文化祭のことがすごく印象に残ってるんですが、ここでは舟唄を歌うだけじゃなくて、船の模型を使ったり、清盛さんの衣装を着て歌ったりしたんです。そうすると、聴覚だけでなく視覚でも舟唄を楽しんでもらえる。その時代に合った伝え方がきつと必要で、「伝わっていくってこういうことなのかな」とそのとき強く感じました。





# 航路が作った奇跡

STORY 02

文化の裏には、  
誰かの願いがある

瀬戸内海に浮かぶ大崎下島の御手洗は、かつて潮待ち・風待ちの港として栄えた商売のまちだ。北前船をはじめ、江戸時代に多くの船が入り出す中継貿易港としての役目を果たしたこのまちは物産の集散地となり、人が集い、物が集まり、文化が交わった。

今でも、通りには歴史を感じさせる立派な建物が並び、どこか格式高い印象も受ける。しかし、その背景にあるのは、必ずしも厳かな物語だけではない。「人間って、見たいものを見たいんですよ」と、御手洗でガイドを務める斉藤孝穂さんは語る。このまちの物語に耳を傾けると、その始まりにあったのは、願いや見栄、プライドといった、その時代を生きる人々のごく普通の生っぽい感情だった。



語り部：斉藤孝穂

呉市出身。瀬戸内エリアを自転車で楽しむ観光づくりに取り組むNPO法人瀬戸内サイクルメディア代表理事。御手洗地区の観光ガイドや重伝建保存活動にも関わり、呉市文化振興課の職員・まちづくりサポーターとして地域活性化にも従事。かつて呉市豊町地域おこし協力隊として御手洗地区に配属され、地域案内やツーリズム事業を展開している。

関連する文化財ストーリー

- ⑥ 海の往来とともに栄えた産業と町並み

## 航路の都合で生まれたまち

御手洗は、古くから人が暮らしていた場所ではない。約350年前までは畑や浜が広がるだけ。埋め立てもされておらず、現在とは地形すら異なる。では、なぜ人が集まったのか。その理由は、江戸時代に起きた航路の変化にある。

航海技術の発達により、船は陸沿いを進む「地乗り」から、沖を進む「沖乗り」へ移行。潮や風の力を借りて航行をしていた時代、ルートが変わり航行途中で待機できる港が沖乗りのルート上に必要になった。御手洗は湾が深く、大型船が複数停泊できる地形だったため、潮待ち・風待ちをする港として好条件だったのだ。船が長く停泊すれば、水や野菜などの生活物資を求める乗組員も集まる。そこに目をつけた商人が全国から移り住み、最盛期には1700人が暮らす港町にまで発展した。

しかし、明治以降に蒸気船や鉄道の普及が進むと、人の移動も物流も陸路を中心に行われるようになった。もう誰も、潮も風も待つ必要がなくなり、御手洗は役目を終えてなくなっていく。興味深いのは、このまちを当時のまま残すことができた経緯だ。



もし、港町にとって代わる大きな産業が御手洗にあつたら、昭和の高度成長期に今文化財となっているものも全て建て替わっていたはず。主要産業がなかったことが幸いして、このまちが残り、今も僕らが見て触れることができる。これだけ大規模に当時の面影を残すまちは、全国的にも数が少ない。これは御手洗の奇跡です。

転機は、1991年に御手洗を襲った大型台風。高波・高潮・強風が家屋や古い建築物、寺社に大きな被害をもたらし、修復や再建のための調査が進められた。その調査を機に、御手洗地区に残るまちなみの歴史的価値が改めて見直され、翌年に重要伝統的建造物群保存地区への選定につながった。

重伝建に選定されたことで、まちの復興や建物の改修費が捻出されるなど、良いニュースもある一方で、一筋縄ではいかない実態もある。



文化財は「一回直して終わり」じゃないですからね。毎年開かれる審議会で決まったところを順に直していくので、みんな列を作って順番待ち状態です。旧遊郭の若胡子屋跡も、昔の間取りを再現する大掛かりな計画があって、今も改修が続いています。文化財を守るには、それだけ時間も労力もかかる。これは愚痴でもなんでもなく、サステナブルな問題があるという文化財の実態です。

潮と風、そして航路の変化という偶然に導かれて生まれた、御手洗地区。奇跡的に残されたこのまちを維持・保存していくには、奇跡には頼れない膨大な時間とコストが必要であるということもまた、文化の実態なのだ。

## 潮待ち・風待ちの港が育んだ文化

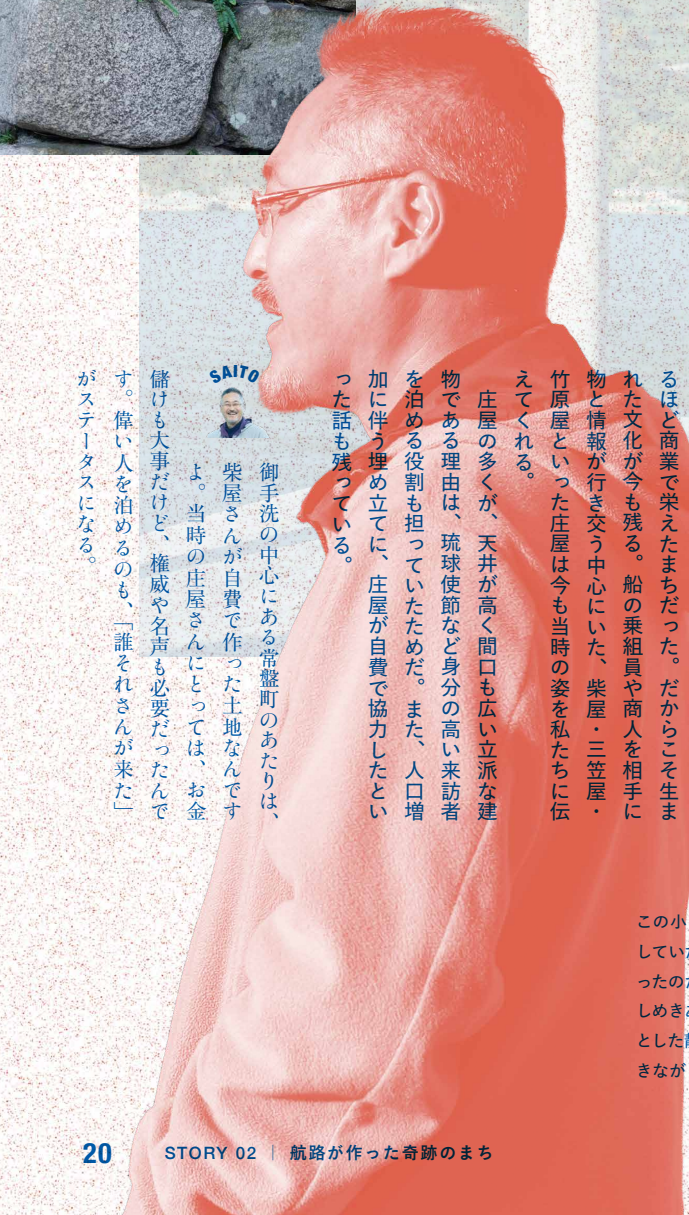
御手洗は、「御手洗相場」と呼ばれる米相場があるほど商業で栄えたまちだった。だからこそ生まれた文化が今も残る。船の乗組員や商人を相手に物と情報が行き交う中心にいた、柴屋・三笠屋・竹原屋といった庄屋は今も当時の姿を私たちに伝えてくれる。

庄屋の多くが、天井が高く間口も広い立派な建物である理由は、琉球使節など身分の高い来訪者を泊める役割も担っていたためだ。また、人口増加に伴う埋め立てに、庄屋が自費で協力したといった話も残っている。



御手洗の中心にある常盤町のあたりは、柴屋さんが自費で作った土地なんですよ。当時の庄屋さんにとっては、お金儲けも大事だけど、権威や名声も必要だったんです。偉い人を泊めるのも、「誰そさんが来た」がステータスになる。

この小さなまちに約1700人が暮らしていた当時、まちはどんな様相だったのだろうか。たくさんの方がひしめきあっていた当時の様子を、凜とした静けさがある今の御手洗を歩きながら想像した。



また、人が集まる宿場町には、必ず遊郭ができる。日本各地の遊郭を大相撲の番付表に見立てて順位付けをした「いろざと番付」では、御手洗は宮島と並んで「西の11枚目（前頭）」と記されており、全国的にも有名な歓楽街であった。その当時営業していた建物だけでなく、遊女たちのお墓を集めた「おいらん公園」も海の見える高台に残る。現代の感覚では「風俗」と聞くとやいやかがわしく思いがちだが、当時は「食う・寝る・遊ぶ」とセットで、生活の延長線上にあったそうだ。

現代価格で、駆け出しの遊女さんで1万5000〜3万円ぐらい、花魁になると15万円ぐらい。でもそれだけじゃダメで、チップや宴会費も必要なので、総額にしたら高級車が買えるくらいになります。ですけど、当時のお金持ちや身分の高い人にとってはそれがステータスになるから、上手な仕組みですね。

商売の臭いをかぎつけた商人、次の船路を待つ人々を楽しませる女郎、時の政治を司る外交施設官……。地形の都合や航路の変化でできた港町では、幾重もの文化の層が積み重なり、それらが複雑に関係しながらこのまちの文化を育んだのだ。

## とある一人の人間に魅せられて

まちを歩き、時代をあちこち行き来しながら御手洗を紹介してくれる斉藤さんだが、御手洗に最初に関心を寄せたきっかけは明治から昭和を生きた「中村春吉」という人物だったそうだ。中村春吉は冒険家として知られ、日本人で初めて自転車で世界一周旅行を行った人物。旅の途中で死闘を繰り広げたジャッカルの子どもを保護して上野動物園に寄贈した話や、世界一周を果たした後、に気合で病を治す「霊動法」の診療所を開いた話など、話題には事欠かない。

SAITO

春吉は56歳のときに隠居したんですけど、隠居するにはちょっと早いなと思って、ずっと謎だったんです。ある日、春吉さんのご遺族から写真を預かっていただいた方が「自分が持っていたも不安だから」と、去年うちに来られて。そしたら、1937年の「第二次上海事変」の写真が出てきて、全部合点がいったんです。春吉さんは、表向きには隠居したことにして、日本の植民地政策を進めるための諜報活動をしてたんだと。この写真を見つけたときは震えましたね。

## 日本初の「自転車による世界一周冒険旅行者」



中村春吉の石碑は、天満宮のすぐそばに建てられている。



# 自分が心動かされたことを話すようにしています。

斉藤さんのこの「見過ごさない力」は、春吉以外の話題にも発揮されていた。御手洗で3番目の庄屋である竹原屋の前で「庄屋さんの家にしては小さいなと思ってたんです」と話す斉藤さん。調べた結果、当時は建物のそばにある塀がなく、近くに見える駐車場まで全てが竹原屋の持ち物だったことが分かったという。斉藤さんのこうした知識に裏打ちされた感性が、このまちの文化と接続する体験をより面白くしている。

SAITO

ガイドをやっても、何回勉強しても覚えられないことってあるんですよ。覚えられないことって、やっぱり自分が興味がないからなんです。ガイドもみんな一緒じゃなくてもいいので、自分が心動かされたことを話すようにしています。

文化が多層的であるように、文化に関心を持つ玄関口もまた、一つでなくいい。そんなことを、斉藤さんのガイドとしての姿勢から学ばせてもらった。

当時の人たちが愛でた、庄屋の竹原屋（御手洗七卿落遺跡）から見える瀬戸内海と四国の美しい景色。



# そして女たちは花を飾る

## 御手洗地区の一輪挿し

花を生けているのは、御手洗に住む女性たち。1994年に御手洗が重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）に選ばれたものの、高齢化が進み空き家は増加。その中で「美しい御手洗の風景を守ろう」と、軒先に一輪挿しを飾る「さくら部」の活動が始まった。

軒下に飾られるのは「さくら部」メンバーが種から育てた花々。清掃活動と合わせ、今でも合計40もの一輪挿しが毎日差し替えられている。「美しいまちなみへの愛」と「やっていて楽しい」という想いが原動力だ。



片山七恵さん

さくら部  
御手洗観光案内所ガイド

「仕事の帰りに花を摘んで、毎朝6時頃に軒下の小簾に生けています。花畑の世話は、今7人ほどいる『さくら部』のメンバーと交代で週に1回。花を生け換え終わったら、御手洗ガイドの仕事に行きます」  
生粋の「御手洗の住人」として、人々を花と語りでもてなし、文化をつなぐ一人。



「なぜそう信じたのか？」が、面白い  
御手洗地区の当時の文化について話を聞いていると「権威」「ステータス」といった言葉を度々耳にする。通りに立ち並ぶ立派な建物の裏から、かつてこのまちで生きた人たちの見栄やプライド、願いとあった、人間らしい生っぽい感情が顔をのぞかせてくる。  
「御手洗」という地名にも、人の願いの息がかかっている。言い伝えによると、学問の神・菅原道真が流罪の道中、この地で手を洗ったことからそう名付けられたという。さらに、天満宮の奥の井戸水で書初めをすると、字が上手くなるという話も。そう聞くと、目の前にある水がたいそうありがたいものに見えてくるから、人間とは単純なものだ。

文化とは、分厚く多層的なものである。それと同時に、その何層にも重なった殻を一つひとつ剥いていった先にあるのは、かつてここで生きた人々の素朴な願いだ。歴史や文化を語ろうとすると、史実としての正しさを意識してしまいがちだが、そこには日々を楽しむ豊かに生きるための人の知恵や遊び心が入り込む余白が大いにある。そんなことを感じさせるのが、御手洗というまちなのだ。

SAITO  
僕の推測ですけど「神様になったようにな人に縁のある水だよ」ってみんな信じて、この井戸水を大事にさせようとしたんじゃないかなって思います。人間って、自分の信じたいものを信じたいんですよ。道真公は本当はここに来てないかもしれないけど「来たんだ！」って信じてることによって、この天満宮ができた。正しいかどうかじゃなくて「なぜそういふふうに言われ始めたか」が、歴史の面白さだと思うんです。

## Q.3

御手洗に遊女はどれくらいいた？

A. 94~300人ほど

1768年の御手洗では、人口543人のうち94人が遊女。最盛期には約300人も遊女が暮らすまちだった。単に遊興の相手としてではなく、遊女たちはまちの行事や祭礼に積極的に参加。時にはまちの資金を貸し付けるなど、まちの人々

と深く関わり経済や文化を支える存在でもあった。2000年頃には御手洗の人々が率先して寄付を募り、海を望む高台に遊女たちの墓を集めた「おいらん公園」を建設。遊女と御手洗の人々は、互いに感謝と敬意を抱きながら生きていた。



「雨風が強い日にもお芝居を見られるように」と、当時の町長さんがポケットマネーで建てた映画館「乙女座」。その名前は、町長さんの母親の名前からとったそうだ。





# 大きな遺産へ 祖父父母の小話

まちの歴史に、  
家族の姿あり

大日本帝国海軍の要衝として鎮守府が置かれたまち、呉。鎮守府とは、艦隊の指揮や港湾の管理、造船や修理などを担う軍事拠点のこと。横須賀、佐世保、舞鶴と並び、呉は近代日本の海軍を支えた4つの中枢の一つである。中でも呉は、戦艦「大和」をはじめとする主力艦の造船を担い、海軍を象徴するまちとして発展した。

その戦前の呉の姿を伝えるものの一つが、2005年に開館した通称・大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館）だ。同館でボランティアガイドを務める初田志織さんは、今この時代を生きる自分たちを「語りをつなげられる最後の世代」と表現する。今、どのようにしてまちの歴史や文化を語り継ぐことができるだろうか。初田さんと考えた。



語り部：初田志織

呉市出身。幼い頃から海外や異文化へ関心を寄せ、高校卒業後は立命館アジア太平洋大学（APU）へ進学し、国際関係や平和をテーマに学ぶ。卒業後、大学在学中に出会った夫の故郷であるサモアへ移住。現地での出産や子育て、就労を経験しながら約12年居住した後、2023年に呉へ帰郷。現在は大和ミュージアムのボランティアガイドとしても活動中。

関連する文化財ストーリー

- ⑦ 鎮守府の開庁により近代都市へと変貌を遂げた呉湾



今も呉に残る大和の大屋根。低山からの視線を遮り、大和の極秘建造を隠すために建設された。

## 呉に色濃く残る、海軍の足跡

呉のまちなみは、ここがかつて海軍のまちであったことを今でも雄弁に語る。山あいに食い込むように広がる港、工廠跡地を転用した施設群、今も海に面して立地する海上自衛隊の基地。かの有名な戦艦大和が建造された「大和の大屋根」も残り、このまちが歩んだ壮大な歴史を伝えてくる。

入船山公園に残る「入船山記念館」も、呉のかつての姿を映すものの一つだ。旧呉鎮守府司令長官官舎として建てられたこの建物は、軍の指揮を担った人物が実際に暮らしていた空間であり、現在は国の重要文化財にも指定されている。

そして、戦前の呉の歩みをより包括的に伝えるのが、大和ミュージアムだ。ボランティアガイドの方々が、それぞれの言葉で呉の歴史の読み解き方を伝える。初田さんのガイドでは、呉の歴史と同時代の世界情勢・日本情勢を重ねながら、「ワシントン海軍軍縮条約」などの国際的な流れの中で、なぜ戦艦大和が建造されるに至ったのかをたどる。そして、建造技術や海戦、海底探査の成果、同時代の艦艇や航空機、原爆から戦後の復興へと展示は進む。戦時の造船技術が戦後の産業へと受け継がれるまでを眺めることで、呉の歴史はようやく立体的に見えてくる。

**HATSUDA**  
私が大和ミュージアムのガイドになったきっかけは、呉市の市政だよりでガイドの募集を見つけたことです。2023年にサモアから日本に帰国して祖母の生家に住み始めた当時、戦争のときの写真や記録がたくさん出てきて。調べていくうちに大和の話にもつながったので、自然な流れでガイドに応募しました。呉や広島だと、小さい頃から「はだしのゲン」にも触れますが、このまちに生まれたからという使命感のようなものは、なんとなく感じていたかもしれないです。

広島は原爆ドームがやはり有名だが、呉のまちにも戦争の名残を想起させるものは多く残る。そして、初田さんが祖母の家で当時の写真を見つたり、学校で『はだしのゲン』を読んだりしてきたように、戦禍の名残はまちの中だけではなく、家や教育の現場にも色濃く残っているのだ。

初田さんの祖母のお兄さんの写真。この家で初田さんの家族は現在暮らしており、写真に映る軒先の塀も顕在だという。

## まちの歴史である以前に、家族の歴史である

初田さんの思考のルーツをもう少し遡ると、ここには南国・サモアでの経験が大きく関係していた。大学卒業と同時に移住し、現地での出産や子育てを経験した初田さんが学んだのは、サモアに当たり前に根づく「家族主義」の思想だったという。

**HATSUDA**  
サモアでは、家族みんなが働く、みんな子どもを育てる、みんなでご飯を作る、という暮らしをしていました。昭和の日本ってきつとこういふ感じだったのかなって思います。サモアは女性の社会進出も進んでいて、ベビシッターをお願いすることも普通だったので、日本での子育てはすごく大変でしたね。サモアでもっと家族を大事にしなきゃと気付かされたこともあって、帰国先の選択は自然と両親や祖父母の家がある呉になりました。

厚重的な調度品に囲まれた応接室。軍事の中核でありながら、空間に差し込むやわらかな光に、ここが人の暮らしの場でもあったことを想像させられる。



初田さん自身は、幼少期から祖父母のそばで育ち、当時から戦争の話をよく聞いていたという。祖父は海軍工廠で図面を書く仕事をしていたから戦争には行かなかったこと、祖母は学校で竹槍の訓練をさせられたこと。他にも、サモア滞在中に読んだ一冊の本には、戦後に進駐軍として呉に渡ったニュージールランド人が、現地の人々との交流や闇市での出来事について記されていた。そこには、現在初田さんが暮らす祖母の家の近所の様子も描かれており、少女時代の祖母に思いを馳せることもあったという。断片的に残っていた記憶の数々が、再び呉で暮らすようになった今、初田さんの中で少しずつ意味を持つようになって始めているようだ。

祖母の家に残る写真の中には、若くして戦争に行った祖母のお兄さんの写真も。そんな当時の写真に思いを巡らせる時間は、家族のアルバムに残された小さな記憶と、このまちに刻まれてきた大きな文脈が接続する瞬間でもある。まちの記憶の中には、幾重もの「家族のストーリー」が折り重なっているのだ。

今って、自分の先祖や家族に興味を持たずには育つこともできる時代だと思うんですよ。核家族なので、親は自分の仕事をし、子どもは学校に行って……。けど、昔だと何世代も一緒に暮らしていて、小さい頃からずっと「うちにはこういう人がいたんだよ」「この人はこんなことしてたんだよ」って話を聞くから、家族とまちが切り離せなかったんだと思います。

どの家族にも、それぞれのストーリーがありますよね。同じ県の中でも、話してみると見えてくる景色が違っていたりするので、自分の家族のストーリーを再発見したい。その気持ちで、ガイドのモチベーションにもなっています。

まちの歴史の中には、家族の歴史もあるのだから、決して他人事ではない。家族のまちが変わり、世代から世代への語りが失われつつある今だからこそ、かつてのまちと家族の距離がいかに近かったかが、かえって浮かび上がる。戦前の記憶が色濃く残る呉のまちで、当たり前だったはずの事実に戻らせてもらった。

昔の人たちも、きっと私たちと一緒にあったと思うんですよ。

語りの火を絶やさないために

今の現役世代は、核家族が進んだ世代であることに加えて、戦争を直接経験しておらず、自らの体験を通じて語ることが難しい。一方で、かつて敵同士だった国の人々と友達になったり、戦争について立場を越えて気軽に語り合うことができる世代でもあるはずだ。今を生きている私たちが、語りをつなぐためにできることはなんだろうか。

初田さんは、学生時代から抱えてきた「異なる地域で生きる人たち」への関心を経て、現在は戦前という「異なる時代を生きた人たち」への関心を高めてきた。かつての時代を語り直そうとする行為は、ある種異文化と対峙する行為でもあるだろう。初田さんが異文化に触れるときに大切にしているスタンスの中に、先の問いに対するヒントがありそうだ。

本質的な異文化理解って、難しいと思うんです。今までいろいろな国の人たちと、さまざまな考え方に触れてきました

が、時にはお互い受け入れ難い場面もあります。だけど、否定はしない。理解はできなくても、結局一緒に人間なんだって思うし、友達になることはできる。昔の人たちも、きっと私たちと一緒にあったんだと思うんですよ。今と価値観は違っても、親がいて、子どもがいて、学校では運動会をして。変わらぬことも多かったんだろうって思います。

朝日が昇れば起き、腹が減れば食べ、夜になれば眠る。かつてを生きた人々も、私たちと同じように日々を生きていた。「歴史」とは、社会的な出来事の連なりである以前に、誰かの生活の積み重ねでもある。そう考えると、身近な人たちの人生の話を聞くことは、そのまま歴史に触れる行為になる。

一方で、身近な人であればあるほど、照れくさくて話を聞けなかったりもする。そんなとき、入船山記念館や大和ミュージアムのような、まちに残る象徴的なものが会話を橋渡ししてくれるのではないだろうか。「何年何月何日」という具体的な時間がそこに刻まれているからこそ「あのとき、何してたの?」と問いかけることができる。文化財をはじめとするまちの象徴たちは、過去の出来事を語り終えるためのものではなく、未来に向けて語り続けるための媒介でもあるのだろう。

大和ミュージアムのすぐそばには、海上自衛隊の広報施設であり、実物の退役潜水艦「あきしお」の内部を見学できる「つつのくじら館」も。

「呉に住んでいても、知らないことは多い」と、初田さん。時にはガイド同士で教え合いながら、自分なりのガイドを作っていくという。





# 同

# 時代

服を接いで、  
歴史を継ぐ

戦後、大日本帝国海軍の施設や技術は一度解体されたものの、その海事技術や港の役割は徐々に受け継がれ、やがて現在の海上自衛隊の拠点としての顔を持つに至っている。まちを歩けば、自衛隊の艦船や基地施設が日常の風景としてあり、海上自衛隊員たちもこのまちで私たちが同じように暮らしている。

「海上自衛隊の制服屋は、今はもううち含めて2軒しかなくなっちゃいました」。そう語るのは、創業66年の歴史を持つ制服のフジの代表・河崎圭一郎さん。海上自衛隊員をはじめ、まちの人となりに触れてきた河崎さんのお話を聞くうちに見えてきたのは、国を守る人たちの一人の人間としての温度だった。



語り部：河崎圭一郎

1974年生まれ、山口県出身。福岡県のコンピューター専門学校を卒業後、就職を機に配属先であった呉に移住。結婚を機に、奥さんの家業である「株式会社 制服のフジ」に入社し、海上自衛隊の制服や関連グッズの制作・販売に携わる。古くから受け継いできた縫製の技術を絶やさないよう、2021年に「HUG KURE LAB.」を立ち上げるなど、ものづくりの現場をひらく取り組みにも力を入れる。

### 関連する文化財ストーリー

- 7 鎮守府の開庁により近代都市へと変貌を遂げた呉湾

## 海軍さんがいたこのまちで 制服屋を営む

「制服のフジ」の昔から続く仕事は、国を守る海上自衛隊員の私物制服の制作。隊員は、国から貸与される官給品の制服を基本的に着用するが、それだけでは週5日の勤務を踏えないため、まちの制服屋で私物を購入して足りない分を補填する。制服のフジ店頭にはずらりと並ぶ制服や帽子のシワ一つない美しいフォルムを見てみると、思わずこちらの背筋が伸びる。

そんな「制服のフジ」にとって大きな転換期となったのは、2005年の大和ミュージアムの開館だ。全国から人が訪れるようになったことで、観光客向けに販売する艦艇をモチーフにしたTシャツや帽子、ワッペンなどのグッズ制作に力を入れるようになった。それまで接点の少なかった観光客やまちの人と直接触れる機会が増え、河崎さん自身の心境にも少しずつ変化があったという。



大和ミュージアムや海上自衛隊のファンの人たちって、本当に呉のことが好きで来てくれてるんですね。僕はそれまで呉にあまり思い入れがなかったけど、彼らの話を聞くうちに「呉ってこんなにいいまちなんだ」と気づかされました。

2021年に「HUG KURE LAB」をオープンしたのも、大和ミュージアムから商店街までのこの通りが観光客の人にとって楽しくなったらいいなと思ったからです。シャッター街だったら、楽しくないじゃないですか。ミシンを踏んでいる姿が外から見ただけでも「呉って、ものをつくっているまちなんだ」って伝わると思うんです。

呉がまちとしてその歴史を語り直すタイミングで、事業や活動の裾野を広げていった河崎さん。地域で働くということは、常にまちの歴史や文化と隣り合わせだ。

「HUG KURE LAB」の「HUG」は、継ぎ接ぎの「接ぐ」。まちと自分たちをつなぐという思いから、この場所に拠点を構えた。通りを行き交う人の姿が目に入る場所にミシンを置き、日々作業を行っている。

## 海上のケーキ屋 「間宮」が伝えること

制服のフジとして、呉の歴史やまちの人と店頭で接してきた河崎さんは、海上自衛隊の方やかつての海軍に関する話題に事欠かない。中でも印象的だったのが、帝国海軍が保有していた給糧艦「間宮」に関するエピソードだ。

現代では大和ミュージアムを筆頭に、戦艦大和が呉を代表する船として語られることが多いが、当時の艦隊勤務者たちにとって、最も身近で愛された存在は給糧艦「間宮」だったという。「給糧艦」とは、洋上で活動する艦隊に食料を供給するための艦船のこと。間宮にはさまざまな種類の食料が積まれていたが、艦隊勤務者たちから特に求められたのは、給糧艦以外の艦隊では作ることのできない「甘いもの」だった。その中でも、羊羹は特に好まれ「間宮ようかん」の呼び名で親しまれていた。



こんな逸話があるんです。羊羹で有名な「とらや」は当時から人気でしたが、呉ではあまり売れなかったそうです。なぜなら、間宮がいたから。間宮で作られる羊羹は艦隊勤務者たちの間でも大人気で、艦が来ると「間宮が来たぞー！」と盛り上がりつつあったそうです。極限の状況の中でも甘いものを楽しみにしている。その感覚は、私たちがケーキ屋に行くのと、まったく変わらないんですね。

食が艦隊勤務者のモチベーションになるといふ事実は、現代の海上自衛隊にも当てはまる。自衛隊は大きく4つの分隊に分かれており、調理と補給を担う4分隊は、特に隊員の士気に関わると言われている。さらに、各艦艇に配置されている調理員長はその艦の料理の味を決めるため、腕の良い人は引き抜かれることもあるほどだ。

そんな話の延長線上で、呉だからこそ語れる平和とは何か、河崎さんが自身の考えを話してくれている。



広島は世界にも知られている平和都市だけど、呉はまた違った平和を語れると思うんです。このまちには、前線で国を守る海上自衛隊の方や、その家族が今も住んでいる。「呉は軍事のまちだから行きたくない」と言う方もいるんですけど、広島と呉の両面を見た上で、一人ひとりが平和について考えることが大事なんじゃないかなって思います。

戦前の記憶を伝える広島に対して、戦後の日本がどのように平和と向き合ってきたのかを体感できるのが、呉のまちだ。このまちを歩くと、海上自衛隊員の姿が特別な存在ではなく、一人の生活者として目に入ってくる。食が隊員のモチベーションになるといふ話にも象徴されるように、国を守る最前線に立つ人々もまた、このまちで暮らし、家族とともに暮らす一人の人間なのだ。過去と現在、その両方を見つめて考えること。私たちの暮らしは、今を生きる人々の営みの上に成り立っている。今を生きて、まちに生きて、一人の人間として多くの自衛隊員と接してきた河崎さんだからこそ言葉の重みを、そこに感じられるのであった。

夏用の白い靴は汚れが目立ちやすいので、自衛官たちは靴墨で表面を磨き上げ、エナメルのような艶を出して履いているという。そうすることで、汚れが付きにくくなるそうだ。

呉はまた違った  
平和を語れる。





# 船を造る

ものづくりって、  
かっこいい

文化を守りたい、大切にしたいと思う気持ちはどうやって始まるのだろう。故郷の原風景を失いたくないという気持ちや、先人たちが積み重ねてきた営みに対する敬意など、そこにはさまざまな理由があるはずだ。  
そうした想いと同じくらい、実は「ただ、かっこいいから」という気持ちも重要なのではないだろうか。そんなことを、呉の造船業界でものづくりを支える有限会社坂本機械工業の坂本篤紀さんと話して気づく。「ものづくりって本当に楽しいし、かっこいいと思うんですよ」。人が何かに惚れ込むときのピュアな気持ちには、この文化を守り伝えたいと思わせる強力な「何か」がありそうだ。



語り部：坂本篤紀

呉市出身。大学進学を機に上京し、卒業後は運送会社で営業職として5~6年勤務。28歳で帰郷し、家業である有限会社坂本機械工業に入社。造船関連の船舶機械修理・部品修繕において、設計や外注先との調整を担う仲介業務に従事。現在は同社の代表取締役を務め、工房「torno」を運営している。

## 関連する文化財ストーリー

- 6 海の往来とともに栄えた産業と町並み
- 7 鎮守府の開庁により近代都市へと変貌を遂げた呉湾

## 呉の造船を影で支え続けて

三方を山に囲まれた穏やかな湾を持つ呉は、古くから船を造り、修理するのに適した場所だった。明治期には海軍工廠が置かれ、戦後は軍需から民需へと形を変えながら、造船や鉄工、機械金属関連の産業がこのまちに根づいてきた。その歩みは、倉橋の「長門の造船歴史館」にも記されている。

造船と聞くと、大きなドックの中でたたくさんの人が作業している様子を思い浮かべるが、その中で行われている工程は細かく分かれている。船がドックに入り、点検が行われると、必ず修理や交換が必要な部品が見つかる。坂本さんの会社が担っているのは、部品の修理を依頼したい造船会社と、修理ができる鉄工所の技術者をつなぐ仕事だ。その多くは、国内造船業を代表する企業の一つである「ジャパンマリンユナイテッド株式会社(JMU)」から預かった部品だという。

部品の修理の仕事は、とにかく時間との勝負。坂本さん自身も「速くて助かった」といった声をかけてもらった瞬間が、仲介業冥利に尽きる瞬間だそう。



坂本機械工業が修理を担っている部品の一例を見せてもらった。これは、船の配管につながっているバルブ。JMUを中心に、造船に関わるさまざまな会社から部品を預かり、職人を通じて加工や修理を行うのが彼らの仕事だ。



一つの船を造る一連の工程の中で、仲介業者である僕は一人浮いているわけだ。なので、例えば仲介の仕事しながら必要な材料を受け取りに行くなど、複数の仕事を同時進行でできる。そんなふうには工夫することもできません。速さに関しては父親の代から意識してきたことで、僕自身も一定の自信を持ってやっているつもりです。

速さと同じくらい、精度も重要だ。間をつなぐ仕事といっても、ただ渡された部品を右から左に渡すだけではない。坂本さん自身は部品の加工こそ行わないものの、依頼主からの条件や希望を噛み砕き、時には自身で図面をひきながら、技術者である職人たちに作業内容を伝えている。



鉄工所任せになると、ミスが生まれ、意思の疎通が上手くいかなかったりする。僕たちのような仲介業者が、外注先の職人さんの熱量をどこまでお客さんと同じ温度感に持つていけるかが、難しいところであり、腕の見せ所だと思います。

仕事の様子を少し覗かせていただくと、そこではパソコンの画面に映し出された図面と睨めっこしながら、机の上で黙々と手を動かす姿があった。仲介の仕事は目立つものではないが、船を動かすためには欠かせない役割。呉のまちで目にする大きな船は、たくさんの造り手の技術と努力に支えられていることを、坂本さんの会社の小さな事務所で見ると、目にした。

## ものづくりの かっこよさを伝えたい

一方で、造船の業界では技術者の高齢化と人手不足が課題だ。「造船や鉄工って『きつい』とか『危ない』イメージを持たれやすいので、この仕事に就きたい若い子って少ないんです」と、坂本さん。他の業界同様に、外国人労働者の力を借りる場面も増えているが、日本へ移住するほどの長い時間軸で携わる人はほんの一握りであり、状況は依然として厳しい。

そこで、坂本さんが2022年に始めた活動が、「工房 Torno」だ。ここでは、旋盤や溶接を使ったものづくり体験ができるだけでなく、物の修理や加工の相談を持ち込んだり、坂本さん自身が作った作品を購入したりすることができる。



バイクの部品や家具のちょっとしたパーツなど、ここに部品を持ち込んでもらったら、僕ができるものは修理したり、家業のツテがある職人に依頼して修理してもらったりします。一般の方が、鉄工所に飛び込みで行くのはやっぱりハードルが高いですし、BtoBで普段仕事をしている人たちが急に一般の方を受け入れることも難しいのが現状です。その橋渡しができるばいと思っ、この工房を始めました。

工房に足を踏み入れると、そこには造船に関わる部品で作られたと思しき雑貨や作品がずらりと並び、背後の壁にかけられた大きなアートワークが迎えてくれた。使い込まれた印象を受ける旋盤加工用の機械のすぐそばには、坂本さんが乗る大きなバイクが鎮座している。そもそも「きつい」「危ない」といったマイナスのイメージは、あらゆる産業の専門化・分業化によって、作ることを暮らしから遠ざけた結果生まれてしまったのではないだろうか。工房に広がる、かっこよく、自由で楽しい雰囲気にも包まれているうちに、そんな考えが頭をよぎる。

昔からものを作ることが好きだったという坂本さん。28歳で家業を継ぎ、造船を支える技術者の仕事を間近で見て気づいたのは、職人たちのかっこよさだった。Tornoの活動の根底には、坂本さん自身の職人やものづくりに対するリスペクトがある。



自分にはない発想や知識を持って、たり、作業のスピード感だったり……。職人さんって、やっぱりかっこいいなって思うんですよね。だけど、若い世代にとっては泥臭い業界に映っていると思うし、大手企業でピシッとスーツを着て働いたり、おしゃれなカフェや洋服屋で働いたりすることの方が華やかに見えると思うんです。そうした若い世代の子たちに「ものづくりってかっこいいぞ」って、伝えたい。全然儲からないけど、ものづくりの魅力をTornoで発信していけたらと思っています。

僕自身も自信を持っている。

旋盤加工とは、金属などの材料を回転させながら刃物を当て、削って形を整える加工方法のこと。造船や機械産業では欠かせない加工技術の一つであり、工房の名前である「torno」とは、スペイン語やポルトガル語で「旋盤」を意味する言葉でもある。



まちの文化に興味を持つ入口は、どこにあるのだろうか。「長い歴史があるから」「全国的に希少なものだから」といった、客観的な事実として理解できる価値も、もちろんその一つだろう。一方で「美味しいから」「綺麗だから」「かっこいいから」といった、心や感情に訴える価値もある。それは、誰かに与えられたものではなく、一人ひとりの内側から湧き上がってくる、あくまで主観的なものだ。

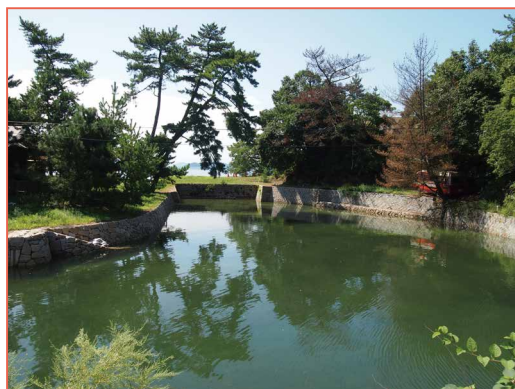
そうした主観的な感情こそが、ピュアに地域の歴史や文化と接続するきっかけになることを坂本さんは教えてくれた。そこに論理的な理由がないからこそ、その文化に対する思い入れはより深く、強固なものになっていくはずだ。

坂本さんが作った作品の一つ。曲線が美しいこのフォルムは、造船所で使用される鉄の棒を曲げて作ったという。ヘルメットをかけるなど、さまざまな使い方ができそう。

終始にこやかな表情で話してくれた、坂本さん。将来的には、この工房にショールームの機能を追加する展望も考えているそうだ。



船を造ったり、  
修理したりしていた跡地



## 桂浜ドック跡

桂浜ドックは、天然の入江を改修し潮の干満を利用して船を建造・修理する船渠（ドック）で、日本最古の西洋式ドック跡とされる。近世まで造船は一般的に砂浜で行われていたが、倉橋では江戸時代時点ですでに、西洋式の乾式ドックを取り入れた造船が行われていた。明治時代に西洋技術の流入によって船舶が大型化すると、ドックは現在のような人工的な船渠へと次第に変化していったが、江戸時代までは国内最先端の造船方法が用いられていた。

※船渠（せんきょ）・ドック：船を建造・修理・点検・整備するための専用施設

日本の船の歴史を  
一から知ることができる場所



## 長門の造船歴史館

山口県にも長門があるが、倉橋島にも「長門」が。この「長門」の名は、万葉集によれば倉橋島の南側が「長門島」と呼ばれていたことから推察される。

この「長門の造船歴史館」に行けば、古代から現代まで、造船で栄えたこの地で培われてきた船造りの技術を、造船の歴史とともに知ることができる。

1989年に15人の船大工により200日かけて復元された「遣唐使船」のそばで、1200年前の船大工たちの技術の高さを感じてみては。

倉橋島は、古くから造船で栄えてきた島。1200年前には遣唐使船を造り、豊臣秀吉が朝鮮出兵をする際の軍船もこの地で建造したと伝えられる。船を造る人・船造りを支える人は、その長い歴史の中でどう変化してきたのだろう。

# 船を造る人、今昔

船造りはどう変わった？



	昔	今
設計図	図板	CAD・精密な設計図
素材	スギ、ヒノキ、クスノキなど	鉄・鋼・合金
道具	船大工用具 船大工が使う木造船用の専用用具	高度な機械・溶接機など
一隻の造船に関わる人の数	船のサイズにより、1人の場合も。一人の職人が一隻の船造りを担える技術を持っていた。	数千～数万人 専門作業ごとに細かく分業化。

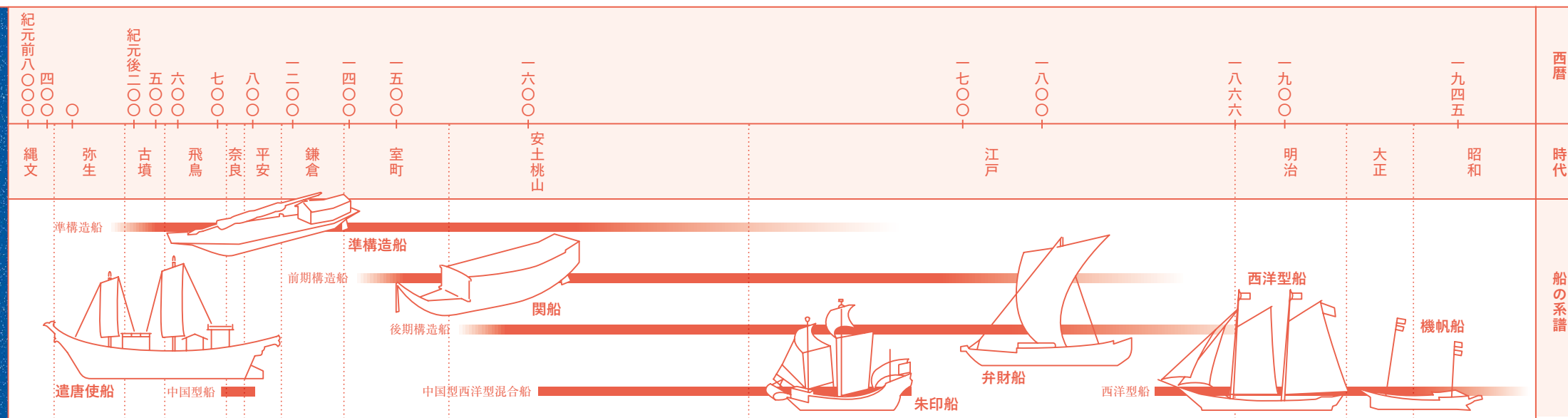
最澄・空海で有名な、「遣唐使船」は呉・倉橋島で造っていたのかもしれない

## Q.4

倉橋での船造りが  
始まったのはいつ頃？

A. 西暦**616**年以前

倉橋での船造りの記録は「日本書紀」にまで遡り、「天皇が、河辺臣を安芸国に遣わして船を造らせた」という記述が残っている。その後、650年頃には百済船2隻をこの地で造ったという記録も。



# 橋をめぐると アドベンチャー

瀬戸内海の多島美を抱く呉には、島々をつなぐ橋がいくつも架かっている。それは単なる移動のための道という存在を超えて、このまちの印象的な風景を形づくり、文化のあり方そのものに影響を与えてきた。そして、呉の島々に橋が架けられてきたように、文化の中にも、何かと何かをつなぐ役割を果たす存在がある。過去と現在、異界と現世、私とあなた――。この橋の向こう岸には何があるのか、語り手の声とともに辿ってみよう。



橋がくれた

STORY 06

# 景色

その景色は、  
走る力になる

今、私たちの目の前に広がるこの景観を、  
最初に見つけたのは一体誰だろう。目の  
前にそびえ立つこの橋も、立派な造りに  
忘れさせられるが、永遠にそこにあるわ  
けではない。私たちが今目している風  
景は、かつて誰かが同じ場所から眺めた  
それとは違い、時代に合わせて変化を続  
けてきた、唯一無二のものなのだ。  
そんなことに気づかせてくれたのは、島々  
を巡るアクティビティを主催している、高  
島俊思さん。この島の景観について、高  
島さんは「海、橋、そして瀬戸内のみか  
ん。これらが一緒になっている景色は他で  
は見られない」と語る。島々に架かった  
橋が私たちにもたらしてくれたものは、  
何だったのか。高島さんの島暮らしについ  
て話を聞きながら、景観と文化について  
考えた。



語り部：高島俊思

愛知県出身。南国パラオでツアーコーディネーターを6年間  
務めた後、2015年に家族で呉市下蒲刈島へ地域おこし協力  
隊として移住。現在は株式会社Alii Tobishima代表を務め、  
マラソン大会「とびしまウルトラマラニック」の開催やとび  
しま海道レンタサイクル事業の運営に携わるなど、とびしま  
海道を観光×スポーツで盛り上げている。

### 関連する文化財ストーリー

- 1 海と島と山が織りなす絶景
- 3 山野河海を拓き獲得してきた大地の恵み
- 5 戦国の争乱により形成された海賊衆の拠点

## 日常の景色が宝になるこの島で

瀬戸内海に浮かぶ7つの島を結ぶ安芸灘とびしま海道。島の斜面に広がる柑橘畑や女猫の瀬戸など、呉に残る文化的景観が織り重なり、この美しい島並を形づくっている。そこに7つの橋が架かったことで、かつて航路を主にしていた島々は陸路でつながり、以前より自由に行き来できるようになった。

2000年に開通した、呉本土から安芸灘大橋へ向かう坂を上がると、とびしま海道の玄関である下浦刈島が顔を出す。橋を車で渡れば、海面からのあまりの高さに少し驚く。当たり前の風景に感じる人もいるかもしれないが、改めてよく見ると突如現れる巨大な構造物は、たおやかな瀬戸内の島並の中で異彩を放っている。

下浦刈島に移住して11年が経つ高島さんは、2018年から「7つの島を巡る旅」と題したマラソン大会「とびしまウルトラマラニック」をコロナ禍以外毎年開催してきた。全国から約500人のランナーが、この場所で行き来できない景色を求めて島々を走る。この島に広がる景色を、高島さんはどう捉えているのだろうか。



過去の「とびしまウルトラマラニック」では、乳母車を押したおばあちゃんが、道端でランナーにみかんを配り始めたことがあった。島の人の温かさに触れる瞬間も、この大会の魅力の一つだ。

# 朝起きると海がシーンと見える。



「とびしまウルトラマラニック」は、景色ありき。最近綺麗な景色や食も少しずつ、この景色の価値に気づいてくれる気がします。

朝起きると、海がシーンと見える。そんな場所で暮らせるのが幸せです。地域の人には「変わった子じやのー」って言われますけど、僕たち夫婦にとってこの景色は特別です。

下浦刈島は、島を一周するように県道が走っている。島外から訪れる人は県道を使いすが、ひとりの島暮らしランナーである高島さんの場合は、あえて一本島の中に入った農道を走る。実際に案内してもらおうと、道を進むにつれて勾配が徐々に上がり、不意に海と橋が織りなす景色が現れる。海の潮に太陽の光がキラキラと反射するその様子を眺めていると、「景色が宝」だと話す高島さんの言葉が心と体に染み込んでくる。それは、見晴らしの良い場所にベンチを一つ置くだけで、立派な展望台になってしまうほどだ。

## 橋がつないだ景色が、文化を育てる

高島さんがここに移住する前の拠点は南国パラオ。それ以前に住んでいた東京での社会人生活に息苦しさを感じていたとき、当時のお客さんから仕事を紹介された高島さん。独身だったこともあり、32歳で移住した南国パラオでの生活には、気付けられることも多かったという。



パラオには信号がなかったんです。日本にいたときには気づかなかったけど、信号って自分の意思と反して「行きたいのに止められる」ものなんです。日本で暮らしていると信号も満員電車で当たり前ですけど、実はストレスになってたんだと気づいて。その点、この島での暮らしは心地良いです。信号は一つしかないし、渋滞も満員電車もない。橋のおかげで、いつでもストパーや病院にも行ける。パラオと似ていて少し不便な部分もあるけど、マインナスに感じたことはないですね。

信号が、意思に反して「立ち止まること」を強いるものなのだとしたら、橋はその逆なのかもしれない。橋は、「向こう岸へ渡ってみたい」「あそこの景色を見てみたい」という人間の素朴な欲求を満たしてくれる存在でもある。

「とびしまウルトラマラニック」も、島々の間にかけられた橋によって生まれた文化の一つだ。ランナーにとっては、景色の変化こそが走り続ける力になると、高島さんは話す。



「とびしまウルトラマラニック」のランナーたちは朝5時にスタートするんですけど、7時くらいに朝日がパーンと上がってくると、みんな立ち止まって写真を撮っています。景色に変化があると、「次の橋まであと5km頑張ろう」と、走る力になるんです。参加者の方から「最近笑えてなかった私が、心から笑顔になりました」という感想をいただいたときは、すごく嬉しかったですね。

農道からの景色を眺めながらストレッチをする高島さん。趣味でランニングをする中で、県道を1回も通らずに島を1周できることに気がついたという。「これは多分僕しかやってない」と、こっそり教えてくれた。



走ることでは見えない景色、それは下から見る橋だと高島さんは語る。島では車移動が主になるため、橋を見るときは基本的には上から。そんな橋を間近で下から見上げると、その大きさと構造物としての力強さを実感する。



## 犬とか猫とか 呉の景観

弘法寺



橋を見る

弘法寺があるのは瀬戸内海をのぞむ  
霊山・野呂山の山の上。  
19歳の空海は野呂山で修行。その  
後遣唐使として唐に渡り、帰国後真  
言宗の総本山を開基。49歳で再び  
野呂山で修行を積んだ出来事を背  
景に建立された。  
本堂から正面に下蒲刈島・上蒲刈  
島などの島々が、東側には大崎下島  
が見える。野呂山を登る道中では、  
安芸灘大橋を上から楽しむことも。

女猫の瀬戸



橋から見る

呉市仁方地区と下蒲刈島の間にある海峡「女猫の瀬戸」。この海峡に浮かぶ小島が、猫がうすくまっていた形に見えることが名前の由来だ。近くの瀬戸のことを猫瀬・女猫の瀬戸と呼び始め、海峡の名となったと言われている。  
安芸灘とびしま海道の玄関口であり、7つの橋のうち最長の「安芸灘大橋」が架かる場所。女猫の瀬戸の上を走れば、急な潮流が渦巻く様子や多島美も満喫できる。

2000



安芸灘大橋

橋を架けるのにかった  
お金は50億円！

2013



第二音戸大橋

1961



音戸大橋

一番最初に架かった橋！

1973

早瀬大橋

1975

鹿島大橋

1979



蒲刈大橋

完成当時は、日本最大の  
農産物運搬のための  
農道橋だった

2008



豊島大橋

日本で唯一21世紀に  
造られた吊り橋

1992



豊浜大橋

アビが飛来するのは  
この辺り！

橋の意外と知らない

いつできた、どんな橋？

人・もの・情報・文化を流通させる「橋」。  
橋は呉の人々の生活を変え、島のまちなみを変えた。  
呉に住んでいても、意外と知らない橋のこと。



Q.5

安芸灘大橋が架かる、「犬戻が鼻」の潮の速さは？

A. 5.5ノット

5.5ノットは、時速10.2キロメートル。  
船乗りには瀬戸内海の中でも特に潮読みと操縦技術を要する速さだ。「犬戻が鼻（いぬもどりがはな）」の名は、瀬戸内地域で「犬さえ引き返すほど険しい

地形で、波が強く近づきにくい岬」を意味する。同じく難所として有名な音戸の瀬戸の潮流も、時速10キロメートルほど。

犬戻が鼻



# 土器

## かまがり

価値を信じ、掘り起こした人たちの記録

安芸灘大橋を渡ると、2つ目に現れるのは上蒲刈島。古代の暮らしの跡がいくつも眠るこの島では、「沖浦遺跡」や「峠古墳」など数多くの遺跡が発掘されている。それらが発掘するきっかけとなったのが「欠片の「製塩土器」だという。製塩土器に目をつけたのは、上蒲刈島に暮らした住職の松浦宣秀さん。製塩土器の発見によって発掘された製塩遺跡から、古代の塩作りを解明するべく「藻塩の会」を立ち上げ、在野の研究者としてその製法を現代に甦らせた。「ひたすら自分の興味で解明までたどり着いた、その執念は本当にすごいと思います」。そう語るのは、松浦宣秀さんの息子夫妻。本職である住職の仕事子どもたちに任せてまで情熱を注いだ塩作りの研究は、やがて古代の営みを今に伝える架け橋となった。



語り部：松浦宣洋、松浦南子

古代の製塩方法を解明し、体験指導や普及活動を行う団体「藻塩の会」を立ち上げた父・松浦宣秀さんが亡くなられた後、代表を引き継いだ息子ご夫妻。本職である住職として働きながら、現在は「かまがり古代製塩遺跡復元展示館」の運営も行っている。

### 関連する文化財ストーリー

- 2 海の恵みを求め根付いた原始の営み

見向きもされなかった土器から、  
全ては始まった

1978年、<sup>らいしょうし</sup>来生寺の住職であり、当時文化財保護委員も務めていた松浦宣秀さん（以下、宣秀さん）は、「峠古墳」の発掘に関わっていた。その際、石棺の副葬品の中にわずかに塩がついた製塩土器が含まれていたという。古墳に葬られるのは当時の分限者——いわゆる裕福な人々であるが、彼らは一体、何によってその富を築いていたのだろうか。宣秀さんが目をつけたのが「製塩」だった。



父は、当時中学校の先生だった藤井清澄先生と、島中の製塩土器を探して回ったそうです。沖浦近辺に目星をつけて探していたところ、その欠片を発見しました。

そんな矢先「県民の浜」というマリリゾート整備のために、沖浦の造成工事が始まったんです。だけど掘れば掘るほど土器片がダラーッと出てきたので、工事をストップして「発掘調査をしたい」と申し出た。でも、あんまり真剣に取り合ってもらえなかったんですね。結果「1週間だけなら」ということで発掘を行ったら、すぐ製塩遺跡（のちの沖浦遺跡）が見つかったんです。

当時はその価値がまだ十分に受け止められていなかったため、「これ以上は工事をストップできない」と、それ以降の発掘は許されなかった。調査によって、古墳時代からここで製塩が行われていたことは判明したが、その製法までは誰も分からないままだった。



製塩の要である藻のホンダワラ。日本全国近海どこでも、だいたい波打ち際に上がってくる。プチプチと玉がついたような、網状のもの。頻りに牡蠣イカダなどにまとわりついて、廃棄処分されるような海藻。

そこで宣秀さんを中心に立ち上がったのが、「藻塩の会」である。ここから、それまでないがしろにされていた土器や遺跡を手がかりに、古代の塩作りを解き明かす試みが始まったのだ。

ケガの功名から生まれた、  
現在に続く藻塩

宣秀さんが「藻塩の会」を立ち上げた当初は、仕事もせず趣味に没頭している暇人だと、周囲にからかわれることもあったという。それでも情熱と執念を持って活動を続けるうちに、少しずつ協力者が集まるように。仕事の合間を縫って、塩を煮詰める炉や土器作り、藻焼きなどを実践する、試行錯誤の日々が始まった。



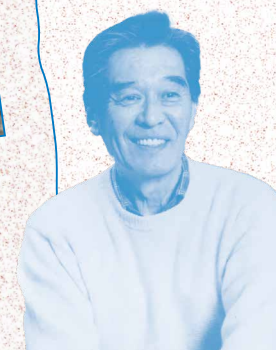
「かまがり古代製塩遺跡復元展示館」に並ぶ土器類。これらは全て、この地の塩作りを紹介したテレビ番組をきっかけに、「何か手伝いたい」と東京から70代で移住してきた女性によって復元されたもの。自費で土器作り教室に通い、技術を学んだその腕は、研究者が見ても本物と見紛うほど。



古代の塩作りに関する古文書的なものは一切残っていないんです。だから、後世に詠まれた万葉集などを頼りに、

十数年かけて研究を行いました。ある唄に「朝風に玉穂刈りつつ」という一節があるんです。この「玉穂」とは何かを特定することから研究が始まりました。玉穂と呼ばれる海藻はいくつかあったのですが、出土した遺跡から「ホンダワラ」特有の微生物が微量に検出されたので、これが塩作りに使われていたのかも、と分かったんです。

ホンダワラを用いた実験を繰り返した末にたどり着いたのが、藻を海水につけて干す作業を繰り返し、より濃い「かん水」を作る方法だった。かん水とは、海藻の成分が溶け込んだ濃い海水のこと。これを手作りの製塩土器に入れ、炉で煮詰める。しかし、そうしてできた塩には少しピリツとした苦みがあり、とても美味しいと言えるものではなかったという。宣秀さんたちは「古代の人々が、この味で納得していたとは思えない」と信じ、研究を続けた。



千年前の日本人は、こうして塩を作っていた！

海水が藻塩になるまで

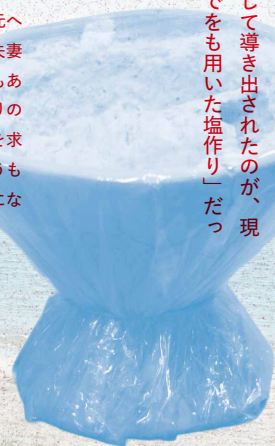




あるとき、かん水作りに使ったホンダワラを庭に置いていたら、「悪臭がする」と近所の人から苦情が入ったんです。

灰にして処分するために焼いたところ、煙が土に上がらず地を這うように山へ流れていきました。不思議に思いながら灰になった藻を見ると、そこに塩の結晶があった。これをどうにか使おうと、かん水の中にその炭灰を入れて一晩置いてみました。炭灰が沈殿したあと、澄んだ上澄みを煮詰めてみたらとてもまろやかで美味しい塩ができました。

この出来事から、万葉集の「夕凧に藻塩焼きつづ」という一節は「塩を煮詰める」のではなく、「藻を焼く」工程を指しているのではないかと考えられるようになった。さらに、「塩焼く煙風をいたみ立ちは上らず山にたなびく」という一節が、煙が地を這うように流れた藻焼きの光景とびたりと重なる。そうして導き出されたのが、現在まで続く製法「灰までも用いた塩作り」だった。



松浦宣秀さんが藻塩の解明に没頭していた頃は、雨が降るとお寺での仕事を放り出してホンダワラの元へ飛んでいっていたという。息子夫妻であるお二人は、当初は戸惑いもあったが、自らも体験用の藻塩作りの準備を行うようになると、「質を求めるとそれくらい集中してしまうものだ」と納得し、理解するようになったそうだ。

# 父が残したものを、 ずっと後世に伝えたい。



藻塩作りの解明を行っている最中の写真。炉や砂浜に並んでいる土器の数々は、全て手作りのもの。こうした実験を繰り返し、藻塩作りの解明にまでこぎつけた。

## この島に 松浦宣秀がいたということ

上浦刈島は周辺の島々と比べて、異様に多くの古代遺跡が発掘されている。他の島々にも同時代から古い歴史があるのに、一体なぜなのか。それは、この島に「松浦宣秀」という人間がいたからだ。遺跡を調べ、価値を見出し、申請して文化財として認めてもらう。長く困難なその道のりを地道に進んできたからこそ、見過ごされてきた土器や遺跡は、語るべき歴史として掘り起こされた。

MANKO



今この藻塩の会には、私どもの世代の友達などが増えて、父と一緒に活動している方は、もう1人か2人になりました。

たね。島の過疎化も進んでいるので、人員の確保も課題の一つです。それでもこの島に観光客や修学旅行生が来ているのは、藻塩が一つの理由ではないかと思っています。父が残したものを、ずっと後世に伝えていくことが、私どもの使命なのかなと思っています。

どんな文化も、そこに価値を見出す人がいなければ、誰にも気づかれることなく埋もれてしまふ。研究者でも専門家でもない、一人の住職による藻塩解明は、古代の人たちの舌を純粹に信じる気持ちと、尽きることはない探究心によって成し遂げられた。

その道中には、ここでは語り切れない苦悩もあったことだろう。一方で、宣秀さんの功績は、歴史とは特別な人だけが見つけ、守るものではないことも同時に教えてくれる。今この文章を読むあなたも、歴史的発見に立ち会う日が訪れるかもしれないのだ。



# 家業がつなぐ、 呉の味

河川が運ぶ栄養豊かな水と穏やかな瀬戸内海の条件が重なり、呉市を含む広島湾は牡蠣養殖に適した環境をなす。呉市は牡蠣の全国シェアの約17%を占め、郷土料理「かきの土手鍋」は文化庁により「100年フード」に指定されている。

一方、人が牡蠣を食べてきた歴史は1000年どころではない。その歴史は10年以上前までに遡るとも言われ、瀬戸内沿岸には長迫貝塚や天応山貝塚など、多くの貝塚が残る。逃げることもなく、栄養価も高い貝は、生き延びるための合理的な食べ物でもあった。

しかし2025年、広島県全域では牡蠣の大量斃死に見舞われ、深刻な状況にある。そんな中、有限会社中野水産3代目の中野仁貴さんは「今になって、牡蠣に対して熱くなってきた」と話す。この地の産業を、広島のを、どう残していくか。その問いは、後世に文化の種を蒔く営みでもある。



語り部：中野仁貴

呉市出身。関東で建築現場監督として勤務した後、結婚を機に呉市へUターン。一児の父として子育てをする傍ら、家業である有限会社中野水産で牡蠣養殖の修行をしながら、独自ブランド「美浄生牡蠣」の販売を行う。その他、オンライン販売やSNSを通じた発信にも力を入れている。

### 関連する文化財ストーリー

- 2 海の恵みを求め根付いた原始の営み
- 3 山野河海を拓き獲得してきた大地の恵み



## 朝5時、牡蠣養殖の現場で

冬になると食卓に顔を出し始める、牡蠣。私たちが魅了してやまないこの食材は、どのようにして食卓に届くのだろうか。朝5時、中野さんの案内のもと、牡蠣養殖の現場に同行させてもらった。周囲はまだ真っ暗で、この船がどこに向かっているのか、素人目には全く分からない。「もうこの仕事で45年です」と、仁貴さんの父・良広さん。慣れた手つきで船を操縦する姿が、先の言葉を裏付けている。

船に揺られること約10分、外に顔を出してみる。牡蠣養殖用のものと思しき筏が見えた。仁貴さんたちは、船から筏に身を移し、水面で揺れる筏の上をスイスイと進む。筏にかけられていた針金をクレーンで引き上げると、海の中に息を潜めていた大量の牡蠣がゆっくりと水面に顔を出す。海中から何か巨大な怪物が出現したかのような迫力だ。吊り下げられた牡蠣の留め具を良広さんがハサミで手際よく切っていくと、ガラガラと大きな音を立てて牡蠣がカゴの中に納められていく。お皿の上に綺麗に盛られている牡蠣のイメージとは打って変わった、海に生きる生命としての牡蠣を目の当たりにした気がした。

牡蠣の引き上げ作業の後は、牡蠣の洗浄とむき身作業を行い、加工業者に卸す準備をする。「打ち子」と呼ばれる人たちの手によって、一つひとつ牡蠣がむき身にされていく。文字通り、目にも止まらぬ早業で身をむいていくその様子は、何時間でも飽きずに見ていられそう。中身を取り除いた後の牡蠣殻は、海の土壌改良に役立つため、作業場すぐ近くの沿岸に一時的に溜められた後、専門業者が引き取りに来る。牡蠣殻を溜めている場所には栄養分が豊富らしく、タイやフグなどの魚が周辺を泳いでいた。



牡蠣を水揚げするクレーンを操縦する良広さん。決して歩きやすいとは言えないカゴの上をスイスイと歩く様子を、年月の積み重ねを感じる。

同じ漁業組合の中でも、1軒ごとにより方はちよつとずつ違います。うちのやり方は、父が確立したやり方です。Uターンしたときに僕は船の運転免許を既に持っていたこともあって、「父親の背中を見て学ぶ」という感じでもなく、もう「これせいで」という感じ。家業で早く覚えなさいといけない立場でもあったので、基本的な仕事を覚えるまでにはそれほどかかりませんでした。

仁貴さんはさらりと話すが、日の出前からの船出も、冬の冷たい海での作業も、牡蠣養殖の日常だと思えば、大変な仕事だ。海の上で、父から子へ自然と受け継がれてきた知恵と技術が、広島と全国の冬の味覚を支えている。

中野水産の売りである「美浄生牡蠣」は、海から上げた後に独自の浄化工程を経て臭みを抜き、牡蠣本来の甘みを引き出した生食用牡蠣。紫外線やオゾン滅菌を施した清浄な海水で一晩かけて丁寧に浄化することで、安全で旨味ある味わいになる。



## 過去に例を見ない事態を目の前に

ところが2025年現在、広島県全域の牡蠣養殖が「大量斃死<sup>（えいし）</sup>」という深刻な事態に見舞われている。中野水産も例に漏れず、先ほど水揚げの様子を見せてもらった牡蠣についても、全体の8〜9割が斃死している状況だった。

夏の高水温、雨量減少による塩分濃度の変化、餌となる植物プランクトンの不足など、考えられる原因は複数あるものの、核心となる要因はまだ解明されていない。一方で、良広さんは「ここ何年か海藻がおらんのです」と、海の変化を確かに実感している。

NAKANO

過去にもたくさん死んだ年があったんですけど、そのときは生き残っている身の状態が良かったので、なんとか多かったんです。けど、今年は死んじゃってるものが多いし、生き残ってるものも身が悪かったりで。筏を見たときには愕然としました。

27歳の頃、当時住んでいた関東を離れ、呉に戻って牡蠣養殖の世界に飛び込んだ仁貴さん。以来、10年に渡って取り組んできた牡蠣養殖に、今大きな壁が立ちはだかっている。海の変化の傍らで、仁貴さんの心境にも変化があったようだ。



NAKANO

8〜9割死んでいるのを見たときはほんとに愕然としましたんですけど、逆に愛らしく思えてきたんですよね。周りからも、応援の声をもらったり、名前も知らない人がうちの商品を買ってくれたりして、もうちょっと頑張りたいなって思ってます。経営のこともあるので、儲けからなくなっても続けるかと言われたら正直分らないですけど、今は足掻きたいですね。この状況になって、牡蠣に対して熱くなってきました。

仁貴さんには、今回の取材を含めて2度お話を聞いたが、以前の飄々とした印象とは打って変わって、その表情や言葉の端々からは、一人の漁業者として海と向き合う覚悟がにじんでいた。大量斃死という冷え切った現場の空気とは対照的に、中野さんはむしろ牡蠣に向き合う熱を高めている。「雨降って地固まる」とは言うが、危機の只中にある今、私たちは文化の何かが更新される瞬間に立ち会っているのかもしれない。

## この時代を乗り越えていくために

原因が究明されるまで待つてはられない漁業の現場では、同業者の間で情報交換をするなど、互いに手を差し伸べながら、この厳しい状況をなんとか凌<sup>（しの）</sup>ごうとしている。中野水産でも、SNSで現在の状況を発信するだけでなく、「食<sup>（た）</sup>ベ<sup>（い）</sup>チ<sup>（ョ）</sup>ク<sup>（ク）</sup>」などの産直サイトでの販売にも力を注ぐ。大切なのは、お客さんとのつながりを途切れさせないことだと、仁貴さんは話す。

NAKANO

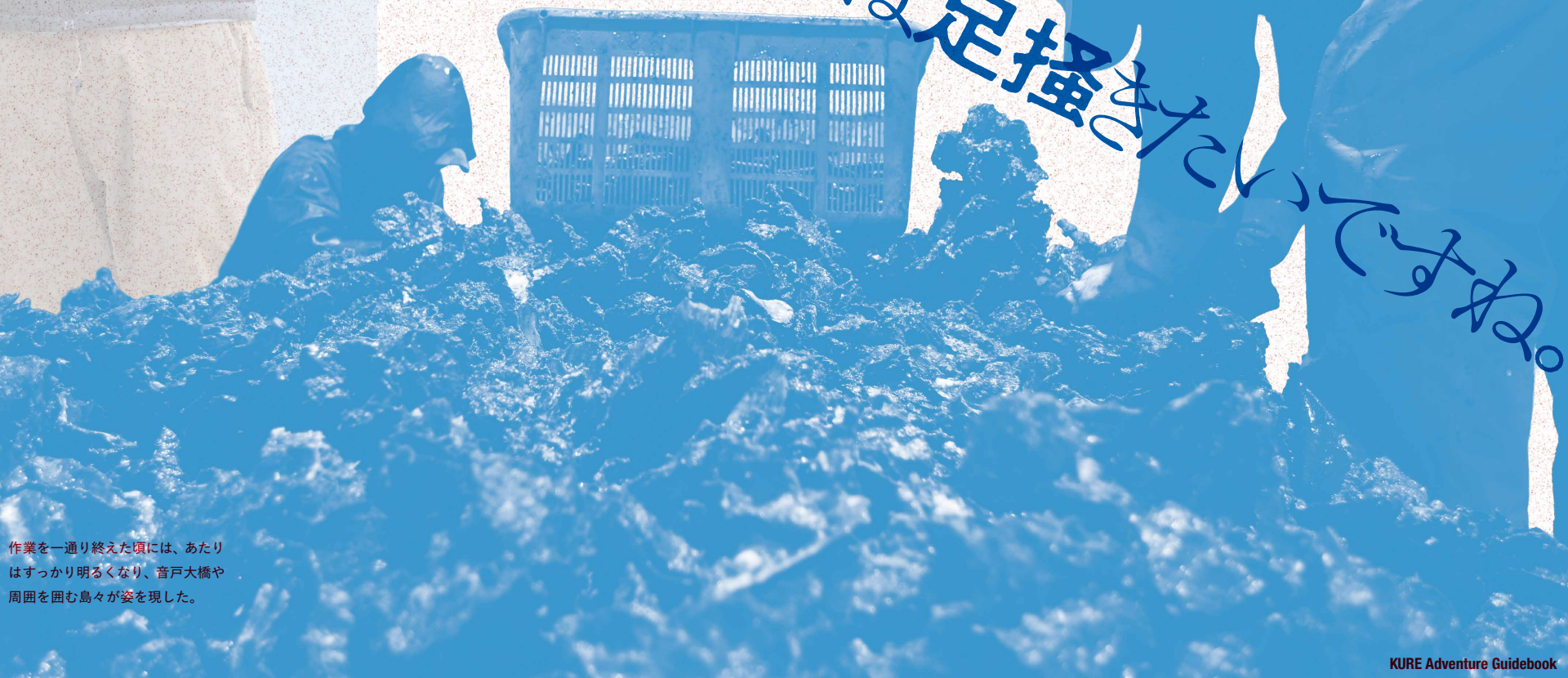
せっかくできた関係性が途切れないように、今まではパソコンで作っていた販路開始のダイレクトメールも、手書きで書き始めました。こういう状況でも注文してくれた人を大切にしていかなければなりません。

NAKANO

今回の事態に関係なく、新しい事業のチャンスがあれば挑戦していきたいと日頃から考えている仁貴さん。さまざまな可能性を模索する中で、ノウハウや知見を惜しみなく提供してくれる方との出会いも。「同業の方もお客さんも、会う人がみんな良い人ばかりで、感謝しています」と、中野さんはしみじみと話す。仁貴さんがこれだけ経営のことを考えている背景には、家族内での役割分担がある。父の良広さんが牡蠣の漁法や現場の技術を担ってきた一方で、仁貴さんは牡蠣の養殖を学びながら、ブランドディングや販売に力を入れてきた。

世代のギャップもありますし、親にとっての子はいつまでも子ども。売り方に関しては「好きにやりなさい」と言っではくれたものの、牡蠣のブランドディングにお金をかけ始めたときには「そんなことをしてどうするんだ」と、指摘されることもありました。大変なこともあります。家族経営には良い面もあります。どれだけ喧嘩をしても、家族なので気づけばまた普通に話しているし、こうして危機に直面したときには、一丸となって乗り越えようとする力がある。その力は、他人同士で働いているよりは強いんじゃないかなって思います。

今は足掻きたいですね。



作業を一通り終えた頃には、あたりはすっかり明るくなり、音戸大橋や周囲を囲む島々が姿を現した。

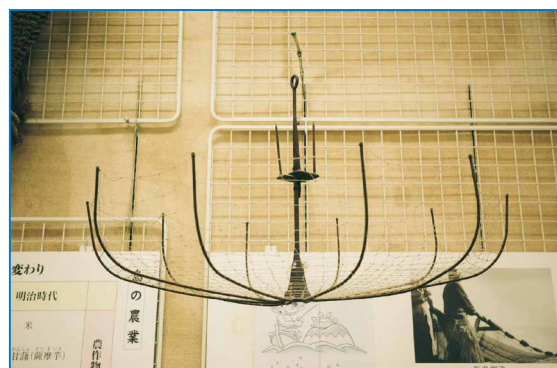
中野家にとって牡蠣養殖は、呉の産業である前に、家族が食べていくための生業だ。売上や海の変化は、そのまま家族の暮らしに直結する。その切実さは、人類の歴史にも重なる。安定して食糧を得ようと、人は長く海と向き合ってきた。倉橋歴史民俗資料館に展示されている数々の漁具が示すように、魚や貝の種類に応じて道具を工夫し、時には養殖という方法を編み出しながら、人は生き延びてきた。中野さんたちが使う船や筏、漁具も、そうした知恵の結晶だ。ただただ、この海で家族が生きていくために積み重ねてきた営みが、結果として技術となり、知恵となり、文化として残っていく。文化はいつとも、生き延びようとする切実さの中から生まれてきたのだ。



# 人間と鳥の連携プレー「アビ漁」



## 倉橋島の漁具



豊かな瀬戸内に面する呉ではさまざまな魚種を食べる文化があり、それぞれの魚を採るための工夫があった。例えば、カワハギ漁では「コウモリカサ」と地元では呼ばれる傘に似た形の漁具を用いている。柄の部分に餌となるクラゲをつけて海の中に漁具を沈めると、多いときには5〜7匹のカワハギが採れるそう。

ここで見れる！



### 倉橋歴史民俗資料館

倉橋島を南に走って車で30分。桂が浜の近くに立つ「倉橋歴史民俗資料館」では長い歴史を持つこの土地の農業や漁業の話、そして江戸時代に最盛期を迎えた弁木船の展示が見れる。

〒737-137  
広島県呉市倉橋町440

呉の食文化といえば、柑橘類は外せない。安芸灘とびしま海道、特に下蒲刈町・大崎下島の豊町は、100年以上の歴史を持つ柑橘類の産地。温暖で雨の少ない瀬戸内の気候と、段々畑という地形的特徴から、質の高いレモンやみかんが採れる。大崎下島は、かつて日本一の収穫量を誇るレモンの産地でもあり「黄金の島」とも呼ばれていた。



江戸時代に山を切り開き、人の手で石を積み作られた農地が、段々畑の景観を織りなす。

## 柑橘の恵み

江戸時代から呉で約300年ほど続いた伝統漁法「アビ漁」。羽が抜け変わる期間に飛べなくなるアビは、主な餌であるイカナゴが豊富で、安全に過ごせるとびしま海道を好んだ。

アビがイカナゴを追いに海中に潜る。すると冬眠中のタイやスズキが触発され、その魚を漁師が釣ることができた。そのためこの地域ではアビのおかげで冬でも魚を豊富に得ることができていた。



アビ漁では、アビとの信頼関係が重要。アビに恐れられないように近づき、漁を始める前に人に慣れさせる。

越冬のためにシベリアから瀬戸内海に飛来する。

## Q.6

アビは今、呉に何羽訪れる？

A. 60羽ほど

1982年には900羽ほど飛来していたアビだが、現在では約60羽まで減少している。その主な原因は、海砂の大量採取によって海底の環境が荒れ、イカナゴの生態系が崩れてしまったこと。十分に餌がとれないため、飛来する場所として選ばれなくなっていったのだ。さらに、近代化

によって高速船などの運行が増え、換羽期で飛ぶことができないアビにとって危険な環境になってしまったことも一因である。広島県の県鳥でありながら、現在は絶滅危惧I類にも指定されている。



今年も

STORY 09

# ヤブ

苦手だった「あの鬼」が、  
呉の誇りと思うまで「ヤブ」が、

竹の棒を握りしめて、今年もヤブがやってくる。  
全身でぶつかり合うヤブたちの気迫には、泣き叫ぶ子どもたちの声がつきものだ。初めて呉を訪れてこの祭りに出会うと、物騒な暴れ祭りの「つだ」と思う人もいるかもしれない。しかし、このヤブ文化について知れば知るほど、他にあまり類を見ない特徴がいくつも浮き彫りになってくる。「小さい頃は怖くてヤブから逃げてました」と語るのは、呉のヤブ文化を発信するヤブ女こと久米ゆきさん。幼少期から大人になるまでの間に、彼女はヤブとの関係性をどのように変えていったのだろうか。近年、さらなる盛り上がりを見せるヤブ文化に迫る。



語り部：久米ゆき

1984年生まれ、広島県呉市出身。大阪芸術大学で舞台芸術を学んだ後、人形浄瑠璃の継承活動に携わる中で、伝統芸能の研究や調査に関心を持つ。その後、呉のヤブへの愛が高じて「ヤブ女」を2012年に設立。SNSでの情報発信をはじめ、自身がデザインしたオリジナルヤブグッズを制作するなど、さまざまな形で多世代にヤブ文化を伝える。

#### 関連する文化財ストーリー

- ④ 海に祈る多彩な信仰と地域に根付いた暮らし

## 想いがあればヤブにもなれる

ナマハゲを筆頭に、日本各地に存在する鬼文化。しかし、呉のヤブは少し違う。一般的に、鬼は人間を脅かす分かり合えない異界の象徴として描かれることが多いが、呉のヤブは、神様の警護と道案内を担う。

彼らは、毎年9月中旬から11月の文化の日まで、呉市内各地の秋祭りに登場する。祭りの見所は、やはり「俵もみ」だ。俵もみでは、神様に奉納するお米を乗せた「とんぼ」と呼ばれる俵神輿を、ヤブたちが竹の棒を使って激しく何度も何度も押し返す。一見、人間とヤブがケンカをしているようにも見えるが、これは奉納されるお米に不純物が混ざっていないかを確かめる、重要な儀式なのだ。



祭りのクライマックスとも言える「俵もみ」は、ヤブが神様の警護役として力を発揮する場面でもある。初めて目を見ると、その激しさに圧倒される。

私が大学生のときに関わっていた大阪の人形浄瑠璃などは、保存会があって伝統を守ることを大切にしている。だから、新しい人を入れたり、新たな演目を作るのって、ハードルが結構高いんです。呉のヤブの場合は、呉市全体の保存会やルールブックがないので、各地域で運営されているんですよ。伝統なんて自由な部分もあって、「想いがあればヤブにもなれる」という空気がまちの中にありますよ。

呉のヤブは、明確な起源が示された資料がほとんど残っていないという。しかし、久米さんが話してくれたエピソードからも分かる通り、参加の間口をさまざまな形で用意し、受け皿を広げながら現代まで発展してきたことは確かだ。

## ヤブでまちが一つになる

伝統文化でありながら、なぜこれほどまでに受け皿としての器が大きいのだろうか。その経緯に迫るには、呉が海軍のまちとして栄えてきた歴史を振り返る必要がある。

戦前、鎮守府が置かれた呉は軍港都市の中心地として栄え、他地域から多くの人がこの地へ移り住んだ。その後、戦争の空襲で呉は大きな被害を受け、市街地は焼け野原と化し、物資不足と流通の混乱を埋め合わせるような形で闇市が発展。戦前から戦後にかけて、呉の人口構成は流動的に変化した。

呉のヤブ文化が持つもう一つの特徴は、いろんな人が祭りに参加できる、受け皿としての器の大きさだ。例えば、子どものヤブ（子ヤブ）が登場したり、他の地域からやってくる「出張ヤブ」が登場したりすることもある。

また、ヤブが身につける面には専門の彫り師もいるが、お祭りに参加する地域の人が自ら彫っているところもある。多くの伝統芸能には、「お決まりの作法」があることが一般的で、道具もまた専門の職人が作り出すことが多い。しかし、彼らは誰かに師事することもなく、ある日急に鬼のお面を見様見真似で掘り出すというから驚きだ。

若者が自分で彫った面をつけて祭りに出ることが許される地域もあって、以前は2、3匹しかヤブがいなかったのに10匹以上現れたり。幼い頃からヤブらしく振る舞うための「ヤブ振る舞い」を見て学んで真似して、中高生の頃にヤブデビューを果たす子もいますね。

# 文化がなくなるとまちやうとまちが死んでしまおうから。

ここからは推測の域を出ないが、戦後の混乱によって従来の地域共同体が崩壊しつつあった当時、ヤブは「血縁や地縁を必須条件としない、地域に等しくひらかれた祭り」だったとも考えられる。民俗学では、地域の祭礼を「外から来訪する神（まれびと）を迎え入れる場」として捉える議論がある。つまり、さまざまな経緯で呉に居合わせた人たちがもう一度一つになるために、ヤブや地域の祭りがその一端を担ったのでは……、とは都合よく想像しすぎだろうか。そう捉えると、お面をつけることで匿名性を持った状態で祭りに参加できることも、大切な点であるように思えてくる。

そして、現代。多くの伝統芸能と同様に、呉のヤブも担い手不足や後継者問題にぶつかっており、受け皿の大きさをさらに押し広げているようだ。

### KUME



かなり高齢のおじいちゃんがなんとか頑張ってる地域もあれば、女の子がヤブをやっている地域もあります。ヤブは男性が担ってきたものなので、女性がやっていることは珍しいです。継承者を増やすことが、呉地域全体の課題ですね。

音戸の舟唄でも同様の話題が出たが、近い将来、海外から移住した人がヤブを担う日が訪れるのだろうか。その可能性も否定することはできない。時代に合わせて形を変えていけるそのおらかさは、公式のルールブックがないヤブだからこそとも言えるだろう。

### 生きた文化が、まちを生かす

ヤブの受け皿を広げるという意味では、久米さんが代表を務めるヤブ女もその一翼を担っている。これまで残されてこなかったヤブの文献を作るために、ヤブ女を立ち上げた久米さん。現在はオリジナルのヤブグッズを作るなど活動の範囲を広げているが、立ち上げ当時はヤブならではの苦労があったという。

活動を始めた頃は、SNSでヤブの情報や写真を投稿してはいたのですが、「何で俺のこのころの写真がないんだ」とか「次はこっこの取材に来んさい」とみたいな感じで、あちこちからお誘いの声が飛んできて、大変でした。体一つじゃとても追いつかないので「ヤブの写真を私たちに送ってください」という形にしました。それしたら、もう「我がヤブ自慢」が、来るわ来るわ。みんな自分のところのヤブを見てほしいみたいです。

呉の人にとって、ヤブがいかに自分ごとであるかが分かるエピソードだ。ヤブは「民俗文化財」という社会的な枠組みから飛び出し、「うちのヤブを見てくれ」と声を上げさせるまでに、呉の人との心理的な距離を縮めている。一体、何がそうさせているのだろうか。久米さんの言葉にヒントがあった。



呉の人って「わし、呉じゃけえ」って言うんです。「広島人」とは言わないのですよ。特にヤブを担う男性の方はそこに対するプライドをすごく強く持っている人が多い。それだけ呉やヤブに愛着があるんだと思います。

コロナでお祭りができなかったときも「文化がなくなっちゃうとまちが死んでしまうから」って、熱い想いを持った人が呉には多いなって思いました。コロナが終息してヤブがまちに現れたときには、もうみなさん「やったー」って感じて。「まちを生きたもの」にするのが、やっぱり文化なんだろうって思いますね。

「文化財」と聞くと、ショーケースの向こう側にある触れてはならない展示物や、歴史的な建造物のようなものを思い浮かべがちだ。一方、呉のヤブは過去の産物として動かないものではなく、このまちに息づき、時代に合わせて形を変えながら、今もなお進化しつづけている。その事実は一子どもたちのランドセルに、私が作ったヤブの巾着がぶら下がっているのを見たときはテンションが上がりました」と、久米さんが語ってくれたエピソードにも象徴されている。

一年に一度、祭りの日に姿を現すヤブが、呉のまちに魂を吹き込む。今を生きる人の手によって文化が育まれ続けることで、まちが生きる。そんなことを、ヤブたちのたくましい背中が教えてくれた。

トートバッグや缶バッジなど、日常で使えるオリジナルのヤブグッズ。可愛らしくアレンジされたイラストと英語表記は、子どもや海外の人にとって、ヤブ文化を理解するための手がかりになりそうだ。





# 未来の

# 文化は

誰かの「いいな」が、文化をつくる

ここまで、呉に残るさまざまな文化と、その継承や発展に遠かれ近かれ関わってきた担い手たちの声に耳を傾けてきた。一方で、まちの文化は今この瞬間にも生まれていることを忘れてはいけない。私たちは今、未来にどんな文化の橋を架けられるだろうか。そんな問いを胸に、倉橋島・桂浜のそばで「seaside cafe ALPHA」を営む天本雅也さんのもとを訪れた。「大層なことはやっていなくて、今あるものに対して『こうなったらもっと面白そう』を探しているような感覚です」と、天本さん。その言葉の中には、こちらの肩の力を抜いてくれるような視点がたくさん含まれていた。



語り部：天本雅也

福岡県出身。関東での外資系医療機器メーカー勤務を経て、2015年に広島県呉市倉橋町へ家族とともに移住。桂浜沿いで「seaside cafe ALPHA」を営む傍ら、地域ブランド「倉橋ZIMAE」の企画・運営に携わる。現在は地域コーディネーターとして移住促進やワーケーション事業にも関わっている。

### 関連する文化財ストーリー

- 4 海に祈る多彩な信仰と地域に根付いた暮らし



## 「こうなったら面白そう」を積み重ねる

倉橋島は、湾ごとに集落が点在する入り組んだ海岸線を持つ島だ。かつて、この島は海上交通の要衝として栄え、遣唐使船や朝鮮通信使が行き交う航路にも位置づけられてきた。島を訪れたときに感じる開放的な雰囲気から、古くから海を通じて多様な文化と人が出入りしていた日常が想像される。

天本さんもそんな倉橋島の魅力に惹かれ、移住を決めた人の一人だ。天本さんが経営する「Seaside cafe ALPHA」に入ると、カウンター席の前に広がる海的美しさに思わず息を呑む。聞くところ、天本さんの義父がかつてこの場所で純喫茶を営んでいたが、亡くなってからの30年は閉まったまま持て余していたという。「地元の人が日常的に集まれる場所を」と始めたこのカフェをきっかけに、天本さんは活動の幅を大きく広げていくことになる。

AMAMOTO



カフェを始めてから、仕入れを通じて農家さんや漁師さんと出会うようになりました。そのつながりで、西日本豪雨のときに未利用魚の話聞いたんです。そこで、市場で値段がつかない魚をフリットにして飲食店で提供する「倉橋島お宝フリット」という企画を始めました。

AMAMOTO



「課題解決をしよう」とか、「倉橋を変えてやろう」とみたいな気持ちは全然ないんです。そもそも、この土地には何百年、何千年って歴史があるわけで、この場所にはこの場所で暮らすための知恵がある。規格外野菜の廃棄も「課題」というよりは、「そういうもんだ」って当たり前になっていた習慣の一つでした。そういうものがあつたときに「こうなったら面白いんじゃないか」って少しずつ工夫をしていくような感覚です。

天本さんがそうであるように、歴史ある文化が生まれた頃に生きていた当時の人々は、目の前の暮らしをより良くするための方法を考え、ただ手を動かしていただけなのかもしれない。文化というものを考えるときの肩の力を、ほんの少し抜いてもらったように思えた。

とはいえ、一つの飲食店で消費できる量には限界があります。ちょうどその頃、農業の現場では規格外のトマトが24トンぐらい廃棄されているという話も耳にして、もつと大量に使うために製品化の話が出たんです。倉橋にあるものを外に向けて発信することも目的に、「倉橋ZIMAE」という名前前で地域ブランドを立ち上げました。

旅館やカフェにも、「倉橋ZIMAE」ブランドの商品が陳列されており、一つひとつの活動が地続きであることがよく分かる。とはいえ、いずれも一朝一夕にできることではない。アイデアが形になるまでには、きつと一口では語りきれない苦労や紆余曲折があつたはずだ。天本さんは、どんなことをモチベーションにこれらの活動に取り組んでいるのだろうか。



館の一角には「倉橋ZIMAE」ブランドの商品を購入できるコーナーを用意。カフェができたことをきっかけに、旅館に泊まりにくるお客さんも増えているそうだ。



## 文化が生まれるときって、きつとこんな感じ

取材中、天本さんは「僕以外にも、話を聞いてほしい人がたくさんいるんです」と、度々口にしていました。若い世代の移住も少しずつ増え、自身の役割の変化を肌で感じているという。

最近の出来事として、天本さんはいくつかが印象に残っている話を紹介してくれた。ご高齢の夫婦によって長年営まれてきた「江後醤油」が後継者問題にぶつかった際に、移住してきた若手が蔵を引き継いだこと。地域の祭りを盛り上げたいと声を上げる若手が現れたり、祭りの神輿を外国ルーツの方が担いだりする場面も出てきたこと。地域の風景やそこで目にする顔ぶれに日々変化があるという。

AMAMOTO



地元の人も、若者も、外国の方も、ミックスチャーな感じですがごく馴染んでるんですよ。新しい文化ってこういうふうにできていくんだろうなって感じますし、これはこれで一つの未来だと思えます。どんな文化も、守るためには同じことをやり続けるわけじゃなくて、常に変化してきたわけじゃないですか。変わらないために、変わり続けているというか。



# 変わらないうために、 変わり続けている。

# 今を生きる文化活動

文化は博物館に飾り保存するだけでなく、  
その時代を生きるものとして使われていくことが大切だ。  
役割を終えた場所や建物の活用や、新しいまちづくりの息吹をご紹介します。



女性の社会参画や子ども支援の拠点となる旧海軍施設。歴史を刻んできた木造の建物で平和への願いを大切にしながら、子ども食堂の運営、障がい者支援、フードバンクによる食料支援など、地域に根ざした取組を展開。誰もが孤立せず、安心してつながれる場を目指しています。国登録有形文化財（2025年11月登録）

Instagram : @90ywca



1921年に海軍の共済病院として建てられて以来、約100年にわたり地域の人々の健康を支えてきた。大正期の洋館風巨木造建築が当時の意匠のまま現存する例は珍しい。呉市の歴史的建造物や民俗芸能を活かし、伝えるための「つむぎてプロジェクト」が清掃活動やアート展示を行う。

Instagram : @tsumugite.project

## 呉 YWCA



「呉の歴史と文化に楽しく触れる」をテーマに、市民有志の実行委員会により始まったイベント。入船山記念館、呉市立美術館別館、美術館通り、旧青山クラブの中庭など、入船山地域一帯が会場となる。地域の飲食店や子どもたちが楽しめるワークショップなどが出店。

Instagram : @irifuneyama\_fes2017

## 入船山秋祭り



NPO法人昭和地区まちづくり協議会が月に一度発行するフリーペーパー。呉市昭和地区の人々が、自身の地域の魅力を掘り下げ、発信する。市民の手で作られるこうした刊行物も、地域に新たな風を吹き込むものの一つ。

Instagram : @kiyomin\_grm

## きよみん通信

AMAMOTO  
誰かが勝手に名前をつけたり、「こんなふうになったら面白いよね」という気持ちで始めたことが、何十年後、何百年後に残ることだってあるわけじゃないですか。歴史とか文化って、きっとそんなものなんじゃないかなと思うんです。

受け継がれてきた文化を残すだけでなく、私たち自身が新しく文化を生み出すことも不可能ではないはずだ。天本さんは、移住してきたある日本語教師の友人の話を持ち上げる。彼は、自ら建てた小屋で本屋を開く準備をしており、その周辺の空き家に集まってきた若い人たちと一緒に「その一帯の通りに愛称のような名前をつけてみたらどうだろう」と話しているそうだ。この話を聞いて、旧道と幹線道路の話思い出す。倉橋島には各集落に生活の営みに沿う旧道があり、幹線道路は後から整備されたもの。通りに名前をつける試みは、暮らしの延長から生まれる文化をもう一度大切にしようとする試みでもありそうだ。



「文化」と聞くと、伝統や由緒正しきといった「守るべき型」のようなものをついついその隣に思い浮かべてしまう。それらの大切さも心得た上で、その型を更新しつづけることも、時には必要なはずだ。今、あなたが住むまちに根差す文化の中にも、誰かの何気ない遊び心から生まれたものがあるかもしれない。

どんなに小さな営みでも、形を変えながら受け継がれ、暮らしに根づいたとき、それは一つの文化になる。未来へ文化の橋を架ける一歩目は、文化になる・ならないを考えることではなく、「このまちは、自分たちの暮らしは、どうなったら楽しいだろう?」と、問うことではないだろうか。





# 呉の文化にもっと触れる もっと楽しむ

本冊子は「呉市文化財保存活用地域計画」をもっと多くの地域の方に知っていただくことを目的に制作されました。「文化」と聞くと遠く感じる。「守らなきゃ」と言われると少ししんどくなる。でも、本当はもっと「楽しむもの」であっていいはず。呉にある文化財にはその時代を生きた人々の物語が詰まっています。本冊子で触れられた文化財は其中でもごくわずか。まだまだ呉には身近なところにたくさんの文化財があります。



文化財の魅力を楽しむためのポイントをギュッと詰めこんだ「概要版」

呉市の文化財とその関わり方までを詰め込んだ「全文版」

「呉市文化財保存活用地域計画」、通称「地域計画(ちいきけいかく)」って？

呉市内の文化財を次世代に残し、保存・活用していくために制作された計画です。

呉市は合併により大きくなったまち。歴史や気候、風土、地勢の異なる地域を含み、多様な文化が育まれました。現在、呉市には157件の指定文化財がありますが、それ以外にも祭礼行事や田園風景、農業・漁業の慣習や道具、食や自然にまつわる文化なども地域の人が大切に守り育んできました。

しかし、情報社会の進展や社会情勢の変化により、こうした文化は次第に失われつつあります。

呉市の自然や暮らし、歴史文化に光を当て、彩り豊かな呉市を未来へ継承する。地域の活力や伝統文化の担い手が減少する今だからこそ、地域への愛着や誇りを育み、まちの活力を生み出すことを目指して、地域計画は作成されました。

「地域計画(ちいきけいかく)」はどこで手に入るの？  
呉市のホームページから「呉市文化財保存活用地域計画 概要版」&「呉市文化財保存活用地域計画 全文」のPDFダウンロードが可能です。



<https://www.city.kure.lg.jp/site/bunkazaitiikikeikaku/>

## 呉市の文化的特徴

- ① 歴史文化を育む 険しく豊かな自然瀬戸内に開かれた 海・山とともに 形成された呉
- ②③④ 海とともにある暮らし 海を恵みと捉え狭小な浦々を生活の場として形成された呉
- ⑤⑥ 瀬戸内海航路の結節点 海を道と捉え連なる島々を中心に 結節点として形成された呉
- ⑦ 海軍の軍事拠点内海と島、そして山が 織りなす地形を活かし 軍事拠点として形成された呉

## 4つの文化財群と7つのストーリー

市内に存在する多様で膨大な文化財について、文化財群としての以下4つの特徴と7つのストーリーに分類することで、市内の文化財の関係性を明確にし、関連文化財群として価値付けを行うことで、文化財の保存・活用を進めます。



# 1 調べる

# 2 守る

「歴史文化を活かしたまちづくり」は誰もが身近なところから取り組むことができます。地域計画に掲げている「調べる」「守る」「活かす」「伝える」の4つの方針に基づき、どのようなことから取り組めるのか参考にしてみてください。

## 知る



- 情報を集める
- シンポジウムや歴史講座に参加する

## 見つける



- 身近な地域を歩いてみる
- まち歩きイベントなどに参加する

## 調べる



- 郷土資料などを読む
- 資料館等の展示施設を見学する
- 地域の歴史に詳しい人などに話を聞く

## 見守る



- 身近な文化財について、異変がないかを見守る
- 地域の伝統行事などを見る・記録に残す

## 協力する



- 歴史的建造物の清掃や古文書の虫干しなどの取り組みに参加する
- 地域で行われている伝統行事などに参加する

## 継承する



- 歴史的建造物や美術工芸品を引き継ぎ、維持管理する
- 知識や経験を残す

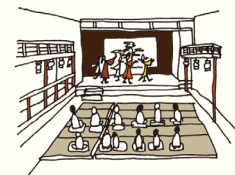
# 3 活かす

# 4 伝える

## 楽しむ



- イベントとして楽しむ
- 空間として楽しむ
- 味覚として楽しむ



## 活用する



- 商品開発に取り組む
- 魅力的な空間として演出する
- 情報発信の拠点として活用する

## 発信する



- SNS等で情報発信する
- 自分たちの取組を知ってもらう

## 共有する



- 一緒に取り組む
- 地域住民と共有する
- 家族で共有する

## 相談する

- 文化財の取扱について相談する



## KURE Adventure Guidebook

### 10の物語

2026年3月31日 初版第1刷発行

発行	呉市 文化スポーツ部 文化振興課 〒737-8501 広島県呉市中央4丁目1-6（呉市役所本庁舎） TEL：0823-25-3462 WEB：https://www.city.kure.lg.jp/
企画・制作	株式会社 Eat, Play, Sleep
クリエイティブディレクション	堤大樹（株式会社 Eat, Play, Sleep）
編集	堤大樹（株式会社 Eat, Play, Sleep） 木村有希（株式会社 Eat, Play, Sleep）
取材・執筆	木村有希（株式会社 Eat, Play, Sleep） 青木穂（株式会社 Eat, Play, Sleep） 小川あびる（株式会社 Eat, Play, Sleep）
アートディレクション・デザイン	小林誠太（株式会社 seee / 株式会社 Eat, Play, Sleep）
写真	吉田亮人
表紙イラスト	木村有希（株式会社 Eat, Play, Sleep）
リサーチ協力	小野香澄（特定非営利活動法人 呉サポートセンターくれシェンド）

本書は2025年9月～11月の取材・調査を基に制作しました。  
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製・転載を禁じます。  
© 2026 呉市  
Printed in Japan



そして今日も物語は続く。

To Be Continued...

**KURE Adventure**  
**Guidebook** **10**  
の物語